Tense・Aspect・Voiceの認識と指導

Awareness and Teaching of Tense, Aspect, and Voice

寺　島　隆　吉（岐阜大学）
TERASIMA, Takayosi (Gifu University)

寺　島　美紀子（朝日大学）
TERASIMA, Mikiko (Asahi University)

はじめに
1．TMメソッドによる読解方法
2．授業開きで提示すること
2．1．語順，時制，「相・態」の相関図
2．2．ネイティブ並みのひとには却って難しい？
3．思考実験表を授業で使ってみて
3．1．思考実験とは？
3．2．中学生用なのに「難しい」
3．3．受動態もふくめた思考実験に
4．数学的思考能力が必要
4．1．単純形はなぜ・どのように難しいのか
4．2　Doesの不思議さ
4．3　思考実験表は縦軸に沿って
4．4　英語の受動態，日本語の能動態
5．動詞句の構成
5．1．動詞句と句動詞の区別
5．2．なぜ動詞句は「完了•進行•受動」の順に構成されているのか
5．3．「記号づけ」の魅力
5．4．動詞句としての塊を理解させるために
6　縦軸方向へ「時制→相→態」
6．1　進行形その形式と意味
6．2．完了形
6．3．完了進行形
6．4．受動態
7．横軸方向へ（肯定形→否定形→疑問形）
7．1．単純形の否定形
7．2．「複合形」の否定形
7．3．疑問形
＜補節＞　「受動分詞 -en」という用語は妥当か
1．過去分詞ではなく「受動分詞」に
2．-ed でなく，-en という表記に
おわりに

Notes
References (Books)
References (URL)
Appendix

はじめに

寺島隆吉は既に『英語にとって学力とは何か』および『英語にとって文法とは何か』で，「Tense・Aspect・Voiceを効果的に認識させるための思考実験表」（寺島隆吉1986：25，2000:164）を発表している。これを出発点にして後藤幸子氏（院生）が修士論文「中学校英語教育の改善：文法指導の「幹」と「枝葉」」に取り組んだ。以下は，この修士論文に刺激されて，寺島美紀子が朝日大学の学生を対象に思考実験をおこなった結果をまとめたものである。

まず寺島美紀子が自分の学生に高校までに習った文法の復習を兼ねて「思考実験表」を書き込ませ，その結果と考察を論文草稿という形にまとめた（したがって以下の「私」は寺島美紀子を指す）。それに寺島隆吉が加筆訂正をおこない，それに寺島美紀子が註や参考文献を書き加え，それを寺島隆吉が再度，検討した。その意味で，この論文は，名実ともに共著と考えている。

１．TMメソッドによる読解方法

私はこれまで「記号づけ」による読解方法を探求し実践してきた（寺島隆吉1986，寺島美2002等）。これは英語が動詞を心臓部とする言語であり，動詞の前に置かれる語が主語subject，後ろに置かれる語が目的語objectであること，すなわち動詞を認識でき，それを丸で囲むことができれば，日本語語順SOVとは異なる英語語順（SVO）が視覚的に明確化され，英文が読みやすくなること，また複文レベルにおいては，連結詞を四角で囲むことによって，理解が難しい長い文も単文に分解され，理解が容易になるからであった（寺島隆吉1986，2000）。

これは，学習者にとっては漫然と英文を読むのではなく，英文の「どこまでを読んだのか」，「何を動詞と考えたのか」，「何を連結詞と考えたのか」といった自らの思考の形跡を，読み終わった後でさえ辿ることのできる一種のリトマス試験紙あるいはカルテ・レントゲン写真となっているという利点がある。さらに教える側にとっては，学習者の「記号づけ」を見るだけで，学習者の理解度を明確に認識できるという利点があるだけではなく，教えるポイントが明確に視覚的に浮き彫りになってくるという利点もある。さらに記号づけしつつ読んでみるだけで，教材研究のかなりの部分が完了することになる。

しかし「記号づけ」は教育に役立つだけではない。例えばDemocracyNow!を日々，聞きつつ読むとき，あるいは翻訳の際など難解な文章が出てきたときなどには特に読みを助けてくれる。このように，教師自身にとって実際に「大いに役立った」「自らの読みの力を高めてくれた」という経験がなければ，「記号づけ」は単なる学生のための便法であり，インパクトの欠けたものになってしまうのではなかろうか。「記号づけ」について，私は授業でも「私自身がこれを使って読みの力が伸びた実感があること」，「むずかしい文も読むのが苦にならなくなったこと」，「翻訳の際にはとくに実際に記号づけしつつ読むこと」も話すことにしている。

そして日々の授業においては，この「記号づけ」を学生への予習課題として提示し，答え合わせをしつつ授業をおこなっている。が，この中で明らかになってきたのは，学生たちが理解していないのは文の構造どころか，動詞の理解すなわちTense-Aspect-Voice（時制・相・態）そのものであるということであった。

この点については既に寺島隆吉（1986，2000）等でも多くの指摘がなされているが，「記号づけ」によって文の構造が明らかになった後（つまり連結詞を四角で囲むことによって複文が単文に分割された後），さてその単文の意味を取ろうとしたとき，学生に「動詞句」の意味が理解できていないことが明らかになってきたのだ。

ところでまず，ここで使用する「動詞句」を定義しておかねばならない。ここで使用している「動詞句」とは，助動詞，be・haveと現在分詞・過去分詞を組み合わせてできあがった「進行形」「完了形」「完了進行形」「受動態」「受動態進行形」等々の総称である。

下に，この「動詞句」を簡単に図示しておくことにするが，TMメソッドによる「記号づけ」（寺島＆寺島2004）では，この「動詞句」を丸〇で囲んで表示することにしている。先述のとおり，こうすることで，文中において英語の語順が____（____）____の形でくっきりと浮かび上がるという利点がある。

		受動態	(be　-ed)
進行形	(be　-ing)	受動態進行形	(be being　-ed)
完了形	(have　-ed)	受動態完了形	(have been　-ed)
完了進行形	(have been　-ing)	受動態完了進行形	(have been being　-ed)

また授業で教えるときは，(be ｜　-ing）や（have｜　-ed）における助動詞部分（be, have）を「左半丸」，進行形や完了形をつくる本動詞部分（現在分詞 -ing，過去分詞 -ed）を「右半丸」と名付けている。

そこで，今後は便宜のため，このような肯定形だけでなく，否定形や疑問形においても以下のように記号づけし，その「丸で囲まれた部分」を「動詞句」と称する。

単純形	(do(does, did) not -)	受動態	(be(am,is,are,was,were) not -ed)
助動詞との組み合わせ等	(can not -)	受動態進行形	(be(am,is,are,was,were) not being -ed)
進行形	(be(am,is,are,was,were) not -ing)	受動態完了形	(have(has) not been -ed)
完了形	(have(has) not -ed)	受動態完了進行形	(have(has) not been being -ed)
完了進行形	(have(has) not been -ing)		

しかし「動詞句」は普通よく使われている「句動詞」と混同されては困るので，句動詞との混同については後に詳述する。こうした混同をしている限り，動詞句の形と意味を正確につかみ使えるようにはならないからである。

2．授業開きで提示すること

2．1．語順，時制，「相・態」の相関図

私は「動詞句」の全体像をしっかり掴ませるために，授業開きで次の 3 点を必ず確認することにしている。

（1）英語と日本語の語順の違い（日本語はSOVだが英語はSOVの語順）

語順　日本語：S　O　（V）

英語：S　（V）　O　.

（2）動詞の時制には現在形，過去形はあるが，未来形はないこと（未来時制を作るにはwillの現在形を動詞原形の前に置く）

時制　現在形：三単現のばあいは s が付く

過去形： -ed

未来（×未来形）： will＋原形

（3）相（Aspect）・態（Voice）の作成に関しては，必ず以下の表を学生に質問しながら提示すること。これを図示すると次のようになる。

相と態の相関図

	現在分詞 -ing	過去分詞　-ed
be （ある・いる）	①	②
have（もつ）	④	③

授業開きの際，この「相関図」を板書しながら，学生とのあいだでの問いと答は次のように進んでいく。

Q:　①のbe＋-ingは？　　A:　進行形です。

Q:　②のbe＋-edは？　　A:　受身形です。

Q:　③のhave＋-edは？　　A:　完了形です。

そして，①〜③まで表が埋まったところで最後に次のような質問をする。「この空欄④は何形でしょう。分かった人にはこの時点でS評価をあげます。さて何でしょう。」

すると学生たちは色めきだって「過去形」「現在形」「過去進行形」「現在進行形」「現在完了形」「過去完了形」「受身形」･･･というように，何でもでたらめに並べ立てる。

「現在･･･形」「過去･･･形」がでてくるのは，時制と相・態を混同しているからである。なぜなら，①〜③の各々が，別々に「現在形」「過去形」（すなわち時制Tense)を取るのであって，「進行形」「受身形」「完了形」そのもの（すなわち相Aspect）は，「時制」とは独立した概念だからである。だから，相と態の相関図に時制が入り込む余地はないはずで，したがって④も「現在」「過去」とは独立した概念でなければならない。

そこで，私は「全て間違いです。ここには何も入りません」と宣言する。「えー，うっそー」。この表づくりは，このような感じで学生の今までの知識に対する驚きと発見をつくりだすことができ，かつ高校までの英語学習の復習を兼ねるという意味で，かなり成果を上げたものだと考えている。[註１]

したがって表１のここまでの完成図は以下のようになる。

＜表１＞　相と態の相関図

	現在分詞 -ing	過去分詞　-ed
be （ある・いる）	進行形　（〜している）	受身形　（〜される）
have（もつ）	なし	完了形 (〜してしまった)

なお，この「Aspect-Voice相関図つくり」については面白いエピソードがある。あるFD研究会で私が模擬授業をしたときのことである。いつもどおり私が「この④には何も入りませんね」と言ったとき，高校時代からアメリカ留学しTOEICスコア900点以上を獲得したという教師が，「ちょっと待ってください，入ります，今考えておりますので，ちょっと待ってください」と言ったのだ。

隣の教員が「入らない，ここには何も入らない！」と彼を制止しているにもかかわらず，何度も「待ってください，入ります，必ず見つけます」と繰り返したのだ。

流暢に英語を話せるひとが，このような基本的な文法事項の認識すら，意外に持っていなかったということに私自身驚きを禁じ得なかったが，ネイティブ信仰が厚い日本の英語教育を今一度見直す必要性を感じさせる出来事でもあった。

２．２．ネイティブ並みのひとには却って難しい？

ヴィゴツキー『思考と言語』によれば，「母国語は下から上へ，外国語は上から下へという発達順序」であるから，アメリカでネイティブ並みに流暢に話せるようになってしまったひとにとっては，私たち日本人が（日本語は上手く話せるが）日本語の文法をきちんと認識できないのと同じであると言えるのかも知れない。これは，そう考えさせる事件であった。ことほどさように，Aspect-Voice認識はむずかしい。

それに加えて，学習者にとって「過去形」と「過去分詞」の違いはもっとも認識しづらいようである。ともに「 -ed形」という形をもっていることがまず第１の理由である。述部動詞のなかに，be動詞やhave動詞とともに受動態や完了形という形で存在しているときよりもむしろ，単独で「準動詞」として文中に出てくると，難易度がかなり高くなる。

英文に「記号づけ」をする場合，準動詞として使われるときは「右半丸」で囲むことになるが，これを「丸」で囲んでしまう学習者が多い。すなわち過去形と過去分詞形の違いを認識できない。

その理由の一つが，「過去分詞」という紛らわしい用語にあるのではなかろうか。だとすればその用語を改めなければならない，というのが本稿の狙いのひとつである。

具体例を見てみる方がわかりやすいであろう。以下，「動詞句」は丸(‾‾‾‾)で囲み，準動詞（原形・現在分詞・過去分詞）は 右半丸|‾‾‾‾)で囲む。

(1) Treasury secretary Henry Paulson (outlined) a new bailout strategy |intended) to |boost) consumer borrowing and |promote) financing for companies that (give) out loans.

財務長官ヘンリー・ポールソンは新しい救済策を概説した。その意図されるところは，消費者金融を促進することと，ローンを出す会社に融資を促進させることです。

学生は，(1)のintendedは過去形とかたちが同じなので丸で囲んでしまうことになる。そうするとintendedの主語がどれなのかわからなくなり，意味が全く取れなくなってしまう。

(2) What (will upset) the market, what (will create) a rocky transition, (is) if it ('s) clear that there ('s) a new shreiff in town, that they ('re going to have to follow) the law, that they ('re going to cut) off all of this corporate welfare, there ('s going to be) real accountability, real conditions |attached) to the money.

市場を動転させ，岩だらけの困難な政権移行を作りだすとすれば，それは次のようなものとなるでしょう。すなわち，もし街に新しい保安官がやってきて，彼ら企業・金融界が法に従わなければならなくなることがはっきりし，この企業福祉のすべてを削除することになることがはっきりするなら，金融取引にかかわる真の条件・真の説明責任が誕生することになる，ということです。

上の (2)のattachedも，過去形とかたちが同じなので丸で囲んでしまうと，「金融に付随する真の条件・説明責任」というフレーズを理解できなくなり，real conditionsを主語と勘違いしてしまうことになる。

(3) And then, |going) on in the piece, it (says) congressional aides (admitted) lawmakers (agreed) to |keep) the change |hidden) to |avoid) public outrage.

そして，記事を読んでいくと，こうありますね，議員補佐官たちが認めたのは，議員たちがその変更が隠蔽され続けることに同意したということです。国民の激怒を避けるためでした。

ところが(3)の場合は，hiddenという形から丸と右半丸の違いがはっきりしているので，意味の切れ目さえわかれば，左から右へと意味を取っていくのは，それほどむずかしくない。

ちなみに，過去分詞とはPast Participleの訳語，現在分詞とはPresent Participleの訳語である。それをそのまま利用して日本における英文法用語となっている。現在分詞 -ingは「〜している」といったような現時点の活動（progressive）を特定するような意味をもつので過去分詞ほどの紛らわしさはない。

しかし他動詞の過去分詞 -edは，be動詞を伴わなくても準動詞単独で「受身（passive）〜されて」になるように，「受け身」の意である。だからこそ「be ＋ -ed」で受動態を形成するのである。

ただし，自動詞の過去分詞は，He is gone.のように，「完了（perfect）〜してしまった」の意となるが，これについては後に詳しく述べる予定である。しかし，過去分詞という用語が過去形と紛らわしいために，混乱が起きやすい。

したがって「過去分詞」という用語ではなく，「受動分詞」という用語のほうが，学習者の認識を助けることに役立つのではないかと考えるのである。

とはいえ，過去分詞を「受動分詞」という名称に改めるとなると，今度は「受動分詞←→現在分詞」となり，用語の対称性が崩れてしまう。そこで，現在分詞という用語も「能動分詞」という用語を用いることによって，用語上の対称的が復活する。それを図示すると次のようになる。

用語の変更

[現在分詞←→過去分詞] ―――――→ [能動分詞←→受動分詞]

つまり，能動分詞←→受動分詞に用語を改めるというわけである。これにより，能動（～して）←→受動（～されて）という対立概念•対称性がより明瞭に認識されるようになる。それを先の表１に当てはめると表２になる。

＜表２＞　相と態（Aspect-Voice）の相関図・改訂版

	能動分詞 -ing　（～して）	受動分詞 -en　（～されて）
be　（ある・いる）	進行形　（～している）	受動態　（～される）
have（もつ）	ϕ	完了形（～してしまった）

上図では，過去分詞(-ed)を「受動分詞」に改めるに当たって，これを（-en）と表記してある。こうすれば，「受動分詞」を「過去形」の（-ed）と混乱することがなくなる。これは単に便宜上のことではなく，英語史から見ても根拠のあることなのだが，これについては後に改めて詳しく説明する予定である。

また，ここで進行形にたいして「～している」という訳語をあてはめてはいるが，これは正確な表現とは言えないが（寺島隆吉1986を参照），当面は簡潔な訳語として，これを用いるものとする。以下，このような認識に至った経緯について述べていきたい。

３．思考実験表を授業で使ってみて

３．１．思考実験とは？

先に述べたように，私は「記号づけ」を使いながら授業をおこなってきたが，学生たちの動詞句の認識については，何とも言えないもどかしさをいつも感じていた。

そんな折り，岐阜市立梅林中学教諭で岐阜大学教育学部大学院生の後藤幸子氏が『英語にとって学力とは何か』（寺島隆吉1986：24-28）のAspect-Voice活用表（A表)をもとに修士論文を作成していることを知った。ただし教えているのは中学生なので，調査項目からは「未来進行形」「過去完了形」「未来完了形」「完了進行形」の欄が省かれていた。

＜表３：活用表A＞　He plays tennis.をそれぞれの指示にしたがって書き換えましょう。

be,do,haveの活用形

原形	現在形	過去形	現在分詞形	過去分詞形
be	am,are,is	was,were	being	been
do	do,does	did	doing	done
have	have,has	had	having	had
play	play	played	playing	played

「動詞句」作成の方程式

未来形	will＋原形
受身形	be動詞＋
進行形	be動詞＋ing形
完了形	have(has)＋過去分詞形

		肯定形	否定形	疑問形
単純形	現在形	He plays tennis.		
	過去形			
	未来			
進行形	現在形			
	過去形			
	未来			
完了形	現在形			
	過去形			
	未来			
完了進行形	現在形			
	過去形			
	未来			

私もこの思考実験表は授業で何度も使ったことはあったのだが，彼女はさらに副詞句・副詞節を加えたB表（表４）を作成し，A表とB表の２つを中高生に実施した。そして，その調査結果を考察するという手法をとっていた。

＜表４＞ 活用表B：ヒントから適切なものを選んで空欄に入れなさい。

			肯定形	ヒント
	1	現在形	He plays tennis_____.	(1) now
単純形	2	過去形	He played tennis_____ .	(2) every day at 3 p.m.
	3	未来形	He will play tennis_____.	(3) when I saw him this morning
進行形	4	現在形	He is playing tennis_____.	(4) next week, if he has free time
	5	過去形	He was playing tennis_____.	(5) since he was 5 years old
完了形	6	現在形	He has played tennis_____.	(6) when he was a student

私はこの研究に非常に興味を覚えた。このB表を私の学生がどれくらいできるか大変興味をそそられたからであった。そこでA表は当面はさておき，B表だけを授業でやらせてみたいと思った。後藤氏からデータを送ってもらって，各クラスの初めに５分ほどでやらせてみた。

３．２．中学生用なのに「難しい」

今回，実際に後藤幸子氏の思考実験（B表）を学生にやらせてみて私自身，正直，驚きを隠せなかった。実は授業でこれを配布した時，もともと中学生用に作成された簡単なものなので学生たちの自尊心を損ねては大変だと考え，「この思考実験表は中学校教員で岐阜大学教育学部大学院生の後藤幸子氏が修士論文のデータとして必要だから」とわざわざ断って，やってもらったのだった。

だから，この活用表B表を埋めるのには，ものの５分しかかからないだろうと考え，小さなB5版に印刷し半裁して配布したのだった。しかし，学生は必死に考えている。「まずいデータを研究用に提供しては，大学生として沽券に関わる」とでも言うようにである。

しかし結果は，惨憺たるものであった。とくに単純形現在に（1）nowを入れる間違いが多かった。私が「真面目でよくできる学生だ」と日頃から考えていた学生までも間違えていたのだ。現在形（1）にnowを入れてしまうと，必然的に進行形現在に入れる副詞句も間違えてしまうことになるからである。学生たちの，この結果を見て，非常に驚かされた。

He plays tennis ___now___.

これまでも表1「相と態の相関図」を授業開きで提示し，各自のファイル裏表紙に書き込ませ常に参照させていたのだが，結局はあまり理解していないことが判明したのだ。先述のとおり，表１「相と態の相関図」を提示し，①「be＋-ing形は？」，②「have＋-ed形は？」，③「be＋-ed形は?」とか，あるいは「この空欄④（have＋-ing形）には何が入るでしょうか？分かった人には•••」というような問答だけでは，B表ができないことが明らかになったのだった。

つまり，たとえ①②③で正解が言えたとしても（すなわち進行形，完了形，受身形という用語は答

えられても），それぞれの意味内容まではきちんと理解できていないことを見落としてしまっていたようだった。そこで改めて「Tense-Aspect-Voice思考実験表」を学生にやらせてみようと考えたのだった。

３．３．受動態もふくめた思考実験に

はじめは，これまで通りの活用表（A表）を使おうかとも思ったのだが，この思考実験をせっかく授業時間帯におこなうのなら，受動態も一度に学べる表を作成して学生に取り組ませ，テストとしてではなく文字通り「思考実験」させ，これまでの英語学習の総復習およびTense-Aspect-Voiceの思考実験にしたいと考えた。

そこで，表５（思考実験表）を作成した。これには，これまで通りの活用表（A表）の他に，受動態，受動態の完了形までを加えた。

＜表５＞Tense-Aspect-Voice思考実験表

		肯定形	否定形	疑問形
単純形	現在形			
	過去形			
	未来			
進行形	現在形			
	過去形			
	未来			
完了形	現在形			
	過去形			
	未来			
完了進行形	現在形			
	過去形			
	未来			
受動態	現在形			
	過去形			
	未来			
受動態完了形	現在形			
	過去形			
	未来			

「受動態進行形」はこの段階では入れていなかった。あまり文章中には出てこないだろうという私自身の思い込みと，もう一つは（be being -ed）というかたちが学生たちには当初わかりにくいのではないかと考えたことが理由だった。

受動態を加えることによって大きく変化することになったのは文の選択であった。寺島隆吉（1986）の元版A表も，変化させる文例は He plays tennis.であり，表４の「単純形・肯定・現在」の欄にも，He plays tennis. という文が記載されていた。

しかし受動態をも含めた思考実験表を作るには，受動態を作ることができる文が必要である。そこで，Iraq war kills many people.という文を選択した。

効果的な思考実験をさせるには現在形が三単現のｓをもつ他動詞である必要がある。しかし現在形は習慣•真理•不変の事実を示すものなので，ここで選択したこの文では，単純形現在と受身形現在は，「イラク戦争は多くの人を殺すものだ」「多くの人がイラク戦争で殺されるものだ」となり，非文となってしまう。

だすれば「イラク戦争」のように個別の戦争ではなく，主語をもっと抽象的な「戦争the war」としてはどうかとも考えられるが，しかし抽象的な「戦争」とした場合は，逆に「過去形」「未来進行形」「完了形」にすると，ほとんどすべての文があまりに抽象的な意味になってしまうため，現実味・実感に欠けてしまうきらいがある。

Our cat catches the rat.という文（寺島隆吉『英語にとって音声とは何か』で例示されている例

文）でもよかったが，１枚目としては使いにくかった。なぜなら，catchという瞬間動詞の進行形は「反復・繰り返し」を表わすなど（寺島隆吉2000），表作成以外に別の説明が必要になる可能性があるからだった。そこで１枚目には用いずに，１枚目を完了した学生に２枚目として取り組ませた。

このように，どのような例文を選択するかは非常に難しい。したがって授業でこれを実際に進めていくときには，Iraq warの場合は「現在形が非文だ」とか，Our catの場合は「進行形が繰り返しを表す」等の解説をしつつ進めていくことが必要となってくる。[註２]

思考実験表（表５）では，表３（A表）にある以下のような公式部分を削除した。対象が大学生でもあるので，be, do, haveの活用ぐらいは敢えて省いたほうがいいと考えたからであった。

＜表３より省いたもの＞

be,do,haveの活用形

原形	現在形	過去形	現在分詞形
be	am,are,is	was,were	being
do	do,does	did	doing
have	have,has	had	having

動詞句作成の方程式

未来形	will＋原形
過去形	過去分詞形　ing形
進行形	be動詞＋ing形
完了形	have(has)＋過去分詞形

学生のなかにはこの活用表があった方がいいものも多いのだが，そこは考えさせるということで敢えて省いた。また，「動詞句作成の方程式」という形で上記のように，すべて載せてしまうのではなく，代わりに次の「相と態の相関図」を載せておいた。

＜表１＞　相と態の相関図

	現在分詞 -ing	過去分詞　-ed
be （ある・いる）	進行形 （～している）	受身形 （～される）
have （もつ）	なし	完了形（～してしまった）

これは，「動詞句作成の方程式」よりも，授業開きに提示している上記「相と態の相関図」のほうが学生にとってなじみがあると考えたからであった。しかしともあれ，この「時制・相・態（Tense-Aspect-Voice）思考実験表」を実際に学生がやり進めていく際にもっとも困難なのが最初の単純形部分である。

＜表６＞ ――――――→横へ

下へ ↓

		肯定形	否定形	疑問形
単純形	現在形			
	過去形			
	未来			
進行形				
完了形				
完了進行形				
受動態				
受動態完了形				

この表を書かせていくと，ほとんどの学生が単純形の肯定形（現在・過去・未来）のあとすぐに否定形→疑問形へ，つまり横方向へ，横軸に沿って進もうとする。私はここで必ずストップをかける。

つまり，この「思考実験A表」を取り組ませるときには必ず，横軸に沿って（つまり肯定形→否定形→疑問形の順に）ではなく，縦軸に沿って（単純形→進行形→完了形→完了進行形→受動態→受動態の完了形の順に）進ませることにしている。

というのは，そうしなければ，ほとんどの学生がそれ以上，書き進められなくなるからである。それは「単純形が単純ではない」からである。「単純形が単純ではない」理由は次節で詳しく述べるこ

とにする。

４．数学的思考能力が必要

４．１．単純形はなぜ・どのようにむずかしいのか

先の節で下方向に縦軸に沿って書き進めさせることを述べたが，しかしながら，縦軸の下方向に書き進めようにも，まず第一に単純形肯定の欄を埋めることがむずかしい。

＜表７＞　――――――→横へ

下へ↓

		肯定形	否定形	疑問形
単純形	現在形			
	過去形			
	未来			
進行形				
完了形				
完了進行形				
受動態				
受動態完了形				

単純形の現在・過去・未来は以下のようになる。が，単純形は単純ではない。ではなぜ・どのようにむずかしいのか。

＜表８＞

		肯定形	否定形	疑問形
単純形	現在形	Iraq war kills many people.	Iraq war does not kill many people.	Does Iraq war kill many people?
	過去形	Iraq war killed many people.	Iraq war did not kill many people.	Did Iraq war kill many people?
	未来	Iraq war will kill many people.	Iraq war will not kill many people.	Will Iraq war kill many people?

肯定形の過去形までは書けたとしても，次のような誤りが続出した。

未来：*Iraq war <u>will kills</u> many people.
否定：*Iraq war <u>is not kill</u> many people.
*Iraq war <u>is not kills</u> many people.
*Iraq war <u>is not killed</u> many people.

間違いではあるが，しかしこれは，彼らも否定形を作るときには「動詞句の中身を2つ以上にしてから，最初の語の直後にnotを入れる」という原則を知っているということでもある。

だから説明しながら図示するときには，「記号づけ」で動詞句は丸で囲むことはあらかじめ説明してあるので，「丸の中身（動詞句）がはじめから２つ以上になっている(will｜kill)が最も簡単ですね」と板書を一番下から書きはじめ，最後に一番上段にkill φ＝do kill を書く。

kill φ＝(do kill)
kills＝(does kill)
killed＝(did kill)
will kill＝(will kill)

図示するときには，「killを否定形にするのがもっともむずかしいですね。だけどwill killを否定形にするのは簡単，willの後にnotを入れるだけですから」と言いつつ，次の図を書く。そして「数式だから左右が同値にならなければならない」と念を押す。

(will kill)＋not ＝(will not kill)

次の過去形も同じである。それを図示すると次のようになる。

(killed)＋not

＝(did kill)＋not
＝(did not kill)

まず，「killはbe動詞ではないので，ゼロ記号として裏に隠れていたものを表に出して，doという助動詞を使う」と言いつつ，kill ϕ ＝do kilという数式を書く。そして次のように板書しながら，「では動詞がkillsのとき，あるいはkilledのとき，kill＝do killはどう変わりますか？」と尋ねる。

kill ϕ ＝do kill
kills＝？
killed＝？

そして次のように種明かしをして，「三単現のs，過去を表すd，を黄色にするとわかりやすいでしょう？」と付け加える。（ここでは板書の黄色を太字で表すものとする。）

kill**s**＝(does kill)
killed＝(did kill)

こうして，kill ϕ ＝do killだとすれば，次は kills＝does killのように数式が成立しなければならないことを説明する。つまり，「三単現のsの数が左右で異なってはいけないこと」「これは過去形でも同じだ」と，次のように図示する。

kill**s**＝(does kill)
kill**s**≠(does kills)
killed≠(did killed)

このように板書した上で取り組ませると，現在形の否定は次のようになるはずである。

kill ϕ ＋not＝(do kill)＋not＝(do not kill)
kill**s**＋not＝(does kill)＋not＝(does not kill)
killed＋not＝(did kill)＋not＝(did not kill)

このように板書した上で取り組ませるのだが，学生の多くがやはり下記のような否定形を作ってしまった。

does not kills
did not killed
did not kills
will not kills

単純形の「否定」の部分で，もし訂正せずにこのまま放っておくならば，次の「疑問」の部分も間違う。更に，その後の進行形の部分も•••という形で収拾がつかなくなって，訂正のしようがなくなってしまうだろう。そこで，まずこの時点で説明を加えていかねばならなかった。そこで板書で次のように説明を加えた。

(kills)＋not≠(does not kills)
sが1つ　　sが2つ
(killed)＋not≠(did not killed)
dが1つ　　dが2つ

この２例で学生に「どこが間違っているから，≠（不等号記号）がついているのか？」と聞く。すると，ようやく「あ，そういう意味ですか。わかった」と納得してくれたようであった。まさに数学的思考能力が求められるのだ。そこで次のように説明した。

「(　　)の内容物としての，三単現のs も過去のd も，その数は否定形や疑問形となったからといって，増えたり減ったりしてはいけない」

「３単現のs や過去のd が２つもあるということは，日本語で言えば，『殺すす』や『殺したた』みたいなことになるでしょ？」

４．２　Doesの不思議さ

ところで，私自身これまで考えてみたこともなかったが，このdoesという語がそもそもわかりにくい。学生にとってdoesの発音はなかなかなじめないらしい。そもそもよく考えてみれば，do[ドゥー]に三単現のs がつくとき，なぜdosではなくdoesになったのか。

実際にdosは名詞do「すべきこと」「行為，行動」の複数形としては存在し（dos or don'tsなどの例がある），発音も[ドゥーズ]である。しかし動詞do - doesの場合は，名詞との違いを残そうとして，dosではなくdoesという綴りになったとすれば，それによってできあがったdoesを，今度はなぜ[ダズ]と発音させることになったのだろうか。

たとえば，doe（雌鹿）[ドウ]の複数はdoes[ドウズ]という発音のままである。同様に，go[ゴウ]の三単現goesは[ゴウズ]，toe[トウ]の複数形toesは[トウズ]である。doの三単現doesだけが何故このように[ダズ]という発音になったのだろうか，全く見当がつかない。

英語には，とくに発音とスペルの関係においてこのような不一致が多すぎる。真面目に考えれば考えるほどその理由が分からず頭がおかしくなってしまう。英米人にDyslexia（学習障害の一種で，失読症，難読症，識字障害，読字障害ともいう）が多いのも頷けてしまう。何も考えずに暗記できる人しか英語は習得できない言語なのか，と途方に暮れてしまうのだ。

それはともかく，doesの場合も，覚えてしまっている人にとっては[ダズ]という発音は何の苦もない至極当然のことである。しかし私の学生のなかには[ドゥーズ]と発音するものがいたが，これは先に述べたようにある意味で正しい間違いと言うことができよう。なかには[ドエス]と言うものまでいた。これは爆笑の渦になってしまった。またdoesのスペルミスでは，dose というのも意外に多い。そんなわけで，このdoesはなかなかに私の学生泣かせである。

ちなみに，私の学生には，usを[ウス]，ourを[オウル]，ownを[（オ）ワン]はあたりまえである。学生に「このウスはどういう意味ですか？」「このオワンはどういう意味ですか？」と聞かれて，何のことを聞かれているのかしばし分からない，ということもしばしばである。笑い事ではない。爆笑も起きない。

私自身，学生が何と発音しているのか聞き取れないことが多く，何度か聞き返してみてはじめてusという文字を発音しているのかが分かるのである。近年，とくにこのような発音をする学生が多いことは特記しておく必要があろう。つまり，中学でも高校でもきちんと発音練習をしたことがない，ひとりひとり発音を先生に見てもらったことがない，ということを物語っているのではなかろうか。

とはいえ，この三単現のs は言語習得論の観点から言えば，もっとも最後に習得される文法事項であるので，発話や作文の際に完全にできなくても悲観することはないのだが，この今取り組んでいる思考実験は，まさに論理的に考えているという段階なので，ヴィゴツキーの「上から下へ」「意識化から無意識へ」の基礎段階である。したがって，この「意識化」の段階では間違いなくできて欲しいのである。単に一種の数学的演算に過ぎないのだから。しかも，それが外国語を学ぶということでもあるのである。

しかし，思考実験表に取り組ませる際には，このように単純形の肯定形の後すぐに否定形→疑問形へと横軸に沿って進めると，ここであまりにも多くの時間と労力を浪費してしまい，学生はもう後の部分をやる気がしなくなってしまうことが予想された。そこで私は横軸に沿ってやらせず，下に向かって縦軸に沿って進めさせたのだった。

一般的に，日本人は（あるいは大学生は）英語が話せるようになりたいという要求が強いのだと言われている。が，私の学生に関しては，英語学習そのものをもうすっかり諦めてしまっている場合が多い。したがって，そういう要求（英語が話せるようになりたいと考えている）を実感することがほとんどないのが実情である。

また，そんな中で，学生を見ていて気づくのは，動詞句をきちんと丁寧に丸で囲むことのできる学

生は思考実験表作成でも間違いが少ないが，面倒くさがり屋で「後で囲むから」と言いつつ囲まない学生，丸をいいかげんに囲む，たとえば動詞句全体を囲まないで一部のみを囲んだり，大雑把に斜めに囲んだり，あるいは動詞句の両端だけを括弧付けするような学生は，ほとんどと言っていいほど思考実験表を間違えてしまう。

つまり彼らは，英語以前に「見えない学力」＝「集中力」がない。「今更こんなことをしても，どうせ･･･」といった投げやりな感じが，記号づけの仕方ひとつにも現れているのだろう。まさに「見える学力，見えない学力」（寺島1986）そのものであることがわかる。「見える学力」は「見えない学力」の上にしか花開かないからである。

4．3　思考実験表は縦軸に沿って

既に述べたように，表2「相と態の相関図」は，「思考実験表」の上部に記載したが，「完了進行形」「受動態完了形」のような「相と態の複合形」は予め記載せず，そのつど下図のように，相と態の複合形概念図を黒板で提示した。

＜表9＞ 相と態の複合形

完了・進行	完了・受動	進行・受動	完了・進行・受動
have -ed +[be -ing]	have -ed +[be -ed]	be -ing +[be -ed]	have -ed +[be -ing] +[be -ed]
have been -ing	have been -ed	be being -ed	have been being -ed

ここでは全体像を示す意味で，「進行・受動態」「完了・進行・受動態」も加えてあるが，授業のこの時点においては提示していなかったことは先に述べたとおりである。

それはともかく，上のような相や態の複合形は難易度が非常に高い。その難しさのなかみの第一は，この「動詞句作成の方程式」に沿って変化させ，表を埋めることができるかどうか（つまり，動詞の合成形が作れるか）である。第二にはその意味がつかめるかどうかである。

これは後でも詳しく述べることになるが，多くの学生が受動態の意味を理解できない事実に私自身がもっとも頻繁に直面しているからである。たとえば次のようだ。(T: Teacher, S: Student)

T: is saidは？ → S: 言った
T: 過去形なの？ → S: 言いました
T: それだと丁寧形になっただけで，やっぱり過去形ね → S: 言う，言った
T: be＋-ed形は何だったっけ？ → S: んー
T: -ed形はなんて言うんだった？ → S: 過去形
T: いつもの表ではどうなっている？ → S: 受身形だ
T: それならis saidの意味は？ → S: 言った･･･

こんな感じの堂々巡りになってしまう。寺島隆吉（1986）にあるのとそっくりの会話だ。〔註3〕

ところで思考実験表を作成するにあたっては，対象が大学生であることを考慮して，先に述べたとおり，A.「動詞句作成の方程式」をあらかじめ載せてしまうのではなく，授業開きに提示したB.「相と態の相関図」を上段に載せることにした。

A. 動詞句作成の方程式

未来形	will＋原形
受身形	be動詞＋
進行形	be動詞＋ing形
完了形	have(has)＋過去分詞形

be,do,haveの活用形

原形	現在形	過去形	現在分詞形
be	am,are,is	was,were	being
do	do,does	did	doing
have	have,has	had	having

B.　相と態の相関図

	現在分詞 -ing	過去分詞　-ed
be （ある・いる）	進行形 （〜している）	受身形 （〜される）
have （もつ）	ϕ	完了形 (〜してしまった)

また，「完了進行形」「完了形受動態」はそのつど，「相と態の複合形」の概念図を以下のように板書して提示したことも先に述べたとおりである。

＜表９＞ 相と態の複合形

完了・進行	完了・受動	進行・受動	完了・進行・受動
have　-ed +[be　-ing]	have　-ed +[be　-ed]	be　-ing +[be　-ed]	have　-ed +[be　-ing] +[be　-ed]
have been　-ing	have　been　-ed	be being　-ed	have been being　-ed

上の表９を説明していて一番困ったのが，学生からbe動詞の -ed形（すなわちbeenという答え）が出てこないということであった。もちろん，上記「A. 動詞句作成の方程式」ように，どこかにbe, do, have動詞の活用形を全て載せておけばよかっただけなのかもしれないのだが，先述のように今回はそれを省いていた。

しかしながらよく考えてみれば，be動詞の過去分詞 -ed形といわれても，beenはなかなかむずかしいようで，「わかりません」や，あるいは「wereです」「wasです」という答えしか返ってこない。いわゆる「規則動詞」は過去形と過去分詞が同じ形なのだから，be動詞の -ed形といわれれば，それは妥当な答えということになろう。

そこで，「過去分詞」「-ed形」という用語を，「受動分詞」「-en形」に変えるなら，多くの混乱を避けられることになるのではないかと考えたのである。私が授業で「相と態の相関図」を提示する際には，これまでも，「過去分詞と言われているが，本当は受身分詞と言ったほうが良いのだ」として，欄外に必ず「受身分詞」と書き込ませてはいたのだが，この小論で「-ed形」という用語にも考察を加えることにした理由がここにある。

そこで，「過去分詞」「-ed形」という用語を，「受動分詞」「-en形」という表記に代えるとすれば，表９は，次の表10のような表記となる。

＜表10＞ 相と態の複合形

完了・進行	完了・受動	進行・受動	完了・進行・受動
have　-**en** +[be　-ing]	have　-**en** +[be　-**en**]	be　-ing +[be　-**en**]	have　-**en** +[be　-ing] +[be　-**en**]
have be**en**　-ing	have　be**en**　-**en**	be being　-**en**	have be**en** being　-**en**

こう表記することでbe動詞の -en形をbe＋en（つまり，beedではなく，beenである）と理解することが容易になるのではなかろうか。とは言え，現存する動詞数という数量的な点から言えば，不規則動詞よりも規則動詞が圧倒的に多く，したがって受動分詞(＝過去分詞)は「 -ed形」のものが圧倒的に多くなるのは事実であろう。

しかし，日常的に使う動詞の使用頻度および認識しやすさの点から言えば（たとえば不規則動詞の圧倒的多数が，eat ate eatenのようなeat＋enの形であることからしても），明らかに「 -en形」という用語のほうが，実際の使用回数という点からして合理的ではないかと考えるのである。学生たちの混乱•混同のひとつの原因が，先述したように「過去形 -ed形」と「過去分詞 -ed形」という外見の同一性によるものだからである。

また，もともと日本人にとっては，日本語における受身形が「迷惑•天災」を表すときのみに使用されることから（寺島隆吉1986），受身形•受動態が理解しにくい。

たとえば日本人が受身形を用いるのは，「妻に逃げられた。子どもに泣かれた。弁償させられた。雨に降られた」のような「迷惑•天災」を表す場合のみである。日本人にとって受身という概念そのものが英語のそれとはかなりの開きがあるのである。以下，それを実例で見ていくことにする。[註 3]

4．4　英語の受動態，日本語の能動態

以下に示す例は確かにいずれも日本語にする際に受身に訳さずとも意味が取れるか，あるいは受身に訳さない方が自然な感じがする。その例を，Democrasy Now! (20081117) のインタビュー Klein (2008) の最初の部分から順に抽出してみよう。

(4) The equity deals that were negotiated with the largest banks and also some smaller banks,...

(a)大手銀行および弱小銀行とで取り決められた株式取引は•••

(b)大手銀行および弱小銀行とで（が）取り決めた株式取引は•••

上の（a)は受動態の和訳，(b)は能動態の和訳であるが，日本語としては，(b)の方が自然な感じがする。しかしここには，日本語では普通は主語を省く習慣があることと大いに絡み合って，和訳する際に主語と目的語を「意識的に入れ替え」「態を変化させて訳す」という作業がある。

たとえば上記(4)では，(a)「大手銀行および弱小銀行とで取り決められた株式取引は•••」が，(b)「大手銀行および弱小銀行とで取り決めた株式取引は•••」のように態を入れ替えている。また「大手銀行および弱小銀行が取り決めた株式取引は•••」のように，with...の意を取り去って「が」を用いることさえ普通である。

(5) So Bloomberg News has lanched a lawsuit in federal court to find out who has recieved the loans and what has been accepted as collateral.

(a)ブルームバーグニュースは最高裁に訴訟を提出した。
誰が融資を受け取っているか，何が担保として認められてきたのか，を明らかにするために。

(b)ブルームバーグニュースは最高裁に訴訟を提出した。
誰が融資を受け取っているか，何を担保として認めてきたのか，を明らかにするために。

上記(5)では，(a)「何が担保として認められてきたのか」を，(b)「何を担保として認めてきたのか」のように，まずあえて主格のwhatをあたかも目的格であるかのように替え，更に態を替えるという二重の書き直しがなされている。what has been accepted「何が認められてきたのか」→「何を認めてきたのか」となっている。日本語ではこの方が自然な感じがする。

(6) There is another $2 trillion that that's been handed out by the Federal Reserve in emergency loans to financial institutions, to banks.

(a)別に 2 兆ドルあるんですよ，（その 2 兆ドルは）連銀が緊急融資で金融機関，銀行に手渡されてきました。

(b)別に 2 兆ドルあるんですよ，(その 2 兆ドルを) 連銀が緊急融資で金融機関，銀行に手渡してきたのです。

(7) Many tax attorneys who were interviewed by the Washington Post said that they felt that ....

(a)ワシントンポスト紙にインタビューされた多くの税理士が言ったところによると，彼らは次のように感じた…

(b)ワシントンポスト紙がインタビューした多くの税理士が言ったところによると，彼らは次のように感じた…

(5)と同様に，主格を目的格に入れ替えて訳し変えているのは，上の(6)(7)も同じである。例えば(6)は，(a)「その２兆ドルは手渡されてきた」が，(b)「その２兆ドルを手渡してきた」と受身を使わずに訳している。

(8) The article is called "In Praise of a Rocky Transition."

(a)記事は「岩だらけの困難な政権移行を賞賛」と題されている。

(b)記事の題名は「岩だらけの困難な政権移行を賞賛」である。

(9) You know, if Barney Frank means what he says, that this violates the acts, then of course they can challenge the deals that have already been signed, these terrible equity deals that are so much worse than what Gordon Brown negotiated in Britain.

(a)バーニー・フランクの言うとおり，これが法令違反なら，もちろん既に署名されてしまった取引に物申すこともできるのです。このひどい株式取引は，ゴードン・ブラウン首相が英国で取り決めたよりもずっと悪いものです。

(b)バーニー・フランクの言うとおり，これが法令違反なら，もちろん既に署名してしまった取引に物申すこともできるのです。このひどい株式取引は，ゴードン・ブラウン首相が英国で取り決めたよりもずっと悪いものです。

上の(8)の(b)は，is calledを「題名は…」と訳している。また(6)(7)と同様に(9)の(b)も，the deals that have already been signedを「既に署名してしまった取引」のように態を入れ替えている。

このようにすぐれた翻訳は主格と目的格を意識的に入れ替え（受動態と能動態を意識的に入れ替えて），あくまでも読んですぐ分かる日本語にしてしまっていることが少なくない。つまり，日本人は常日頃から，そういった受動態を使わない日本語に慣れ親しんでいるわけである。だから学生たちが受身を認識しにくいのは当然でもある。だから先述したように，次のような堂々巡りが毎日繰り返されることになる。

T: is saidは？→S: 言った，
T: 過去形なの？→S: 言いました，
T: 丁寧形になっただけでやっぱり過去形ね？→S: 言う，言った，
T: be＋-ed形は何だったっけ？→S: んー，
T: -ed形はなんて言うんだった？→S: 過去形，
T: いつもの表ではどうなっている？→S: 受身形だ，
T: それならis saidの意味は？→S: 言った･･･！？

要するに，先の「取り決めた」という和訳も，和訳する際に日本語らしく（あるいは読んですぐにわかる日本語にしようと）ということで，翻訳者があえて能動態を使っているに過ぎない。つまり，英文の読みの際には受動態だと認識しつつ，しかし，日本語にするときに意識的に能動態にしているのである。ところが学生が和訳するときは，これとは逆で，受動態のものまで無意識に能動態にしてしまうので，主客転倒の和訳になってしまうのである。

英文において受身・受動態が認識できなくては主客転倒の理解となり，文を正確に理解することは不可能となる。だから，どうしても受動態を意識的・自覚的に認識させる手立てを講じたいのである。その解決策のひとつとして，私は「受動分詞＝ -en形」という表記を提案しているのである。やはり日本人にとって理解しやすい表記法，理解しやすい用語が必要だと考えるからである。

既に何度も述べているように，学生を見ている限り，「 -ed」はどうしても過去形を連想させてしまうように思えるからである。その上，「過去分詞」という用語そのものが，受身認識の難しさに拍車を掛けるものとなっているのではないか，と考えるからである。

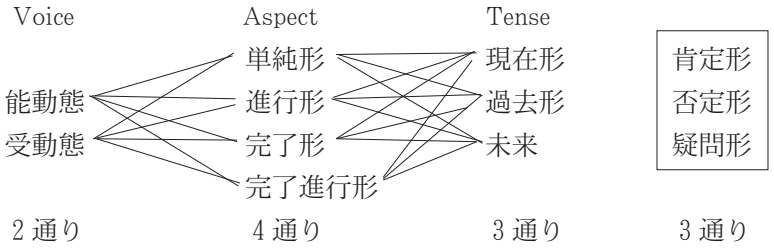
５．動詞句の構成

５．１．動詞句と句動詞の区別

それにしても一つ疑問がある。なぜ動詞句の構成順序が「完了・進行・受動」なのか，ということである。しかし，その考察に移る前に，ここで使用してきた「動詞句」をもういちど定義しなおしておきたい。

というのは，「動詞句」を「句動詞」と混同する用語が至る所で多く見られるからである。こうした混同をしている限り，「動詞句」の形と意味を正確につかみ使えるようにはならないからである。

ここで使用している「動詞句」とは，先述のとおり，助動詞，be・haveと現在分詞・過去分詞を組み合わせてできあがった「進行形」「完了形」「完了進行形」「受動態」「受動態進行形」等々の総称である。寺島隆吉（1986，2000）による概念図では，Tense-Aspect-Voiceは以下のような構造になっている。



つまり，文はまず大きく能動態か受動態かによって二分され，次にAspectとして四通り，Tenseとして三通りに枝分かれする。したがって基本的には一つの動詞に対して全部で24通りの「組合せ」があることになる。この24通りの「組合せ」を総称して「動詞句」と名付けているわけである。これには更に肯定形と否定形と疑問形があるので，実際は一つの動詞に関して72通りの「組合せ」が存在することになる。

この「組合せ」「動詞句」をどの順序で，どう教えたらよいかについては，項を改めて論じることにして，少し脱線になるかもしれないが，ここでは句動詞についてみていきたい。

句動詞（Phrasal Verb，Idiom）は，「動詞＋副詞」「動詞＋（副詞）＋前置詞」で構成され，まとまって１つの動詞のように機能する定型フレーズで，例えばget up，take off，look forward toなどである。熟語動詞，複合動詞，群動詞などとも呼ばれる。

句動詞は一般には，見ただけでは意味が推測しづらい，ということで暗記項目となってしまい，英語学習のかなりの部分が，この句動詞を覚えることに当てられているのは，途方もないエネルギーの無駄使いと言うべきである。ネット上でも「句動詞の数は限られている，72個しかない」と書いてあるかと思えば，逆に「もっと多くの句動詞を知りたい」といった発言も見かける。

また「日本人は難しい動詞を使いすぎる，もっと簡単な語の組み合わせでできる句動詞を使うべきだ」という指摘もよく見られる（Basic English[Ogden 1930] も簡単な単語だけで間に合うというものである）。しかし，これは間違った指摘であると言わねばならない。なぜならネイティブでない学習者には，簡単な単語ばかりでできているからといって必ずしも簡単だとは言えないからである。鈴木孝夫（1973，1985，1995）も「日本人はむしろ多音節語（big word）の難しい動詞を使うべきである。その方が生活言語として英語を使っていない外国人には使いやすい」と述べている。

私自身も高校時代に句動詞は嫌と言うほど覚えさせられた。月刊『高校英語研究』（研究社）なども，毎月巻末にそのような熟語集をたっぷりと載せていたので，「覚えなければならない」という強迫観念に襲われた。しかし覚えて，それをいざ使おうとすると，文のどこにどう配置していいのやらさっぱり分からないという有様で，「覚えても使えない」「覚えても忘れる」「覚えても役立たない」というのが現実だった。

というのは句動詞には語順を変更できるものとできないものがあるからである。「動詞＋副詞」ならば目的語は副詞の前後のどちらにも置ける。しかし目的語が代名詞であれば「副詞の前」にしか置けない。たとえばknock downは，knock down the fenceでもknock the fence downでもよいが，knock down itは不可，knock it downとしなければならない。

knock down (取り壊す•打ち負かす) ○knock down the fence
○knock the fence down
○knock it down
×knock down it

また句動詞が「動詞＋副詞＋前置詞」なら，一般的には語順の入れ替えはできない。たとえば，動詞＋副詞のlook upはlook it upと入れ替えできるが，動詞＋副詞＋前置詞のlook up to (尊敬する), look up at（～の方向に顔を上げる), look up in (検索する）などは，目的語が代名詞であってもlook it up to, look it up atとはできない。にもかかわらず，look it up in a dictionaryは存在する。つまり形だけでは判断できないのである。

look up（見上げる）	○look it up
look up to (尊敬する)	×look it up to
look up at (顔を上げる)	×look it up at
look up in (検索する)	○look it up in a dictionary

あるいはまた，live it up，live up toは存在するが，live upという組み合わせの熟語そのものはないなど，あまりに非原則的，不規則性が強いのである。

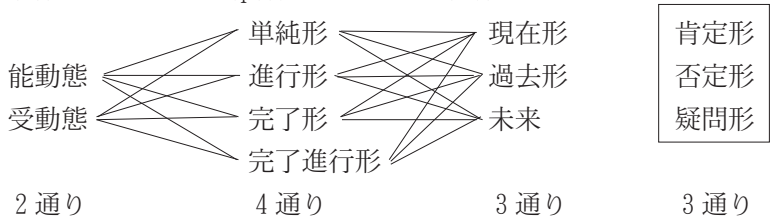
live it up（贅沢する）　live up to（果たす）　*live up

このような一見すると非原則的な句動詞を使いこなすことや，ネイティブのようなこなれた表現を追い求める必要など，日本人にとっては必要ないのではなかろうか。覚えても覚えても忘れてしまうような句動詞の暗記ばかりにエネルギーを取られているからこそ，あるいはそんなことに疲れ果ててしまうので，もっとも重要な動詞句のTense-Aspect-Voice変化規則を習得できないのではないか。枝と幹を根本から間違えているとしか言いようがない。

５．２．なぜ動詞句は「完了•進行•受動」の順に構成されているのか

それにしても，なぜ動詞句は「完了・進行・受動態」の順に構成されているのか。前述したように，寺島隆吉（1986, 2000）による概念図では，Tense-Aspect-Voiceは以下のような構造になっている。

＜表11＞



つまり，文はまず大きく能動態か受動態かによって二分され，次にAspectとして四通り，Tenseとして三通りに枝分かれする。したがって基本的には一つの動詞に対して全部で24通りの変化があることになる。これには肯定形と否定形と疑問形があるので，理論的には一つの動詞に関して72通りの文が存在することになる。

ところが，通常，たとえば進行形•完了形を考える際にはこれが能動態であるということがほとんど全く認識されていない。だから，いざ受動態を考える段になって突然，受動態の進行形，受動態の完了形，受動態の完了進行形はどうやって作ればいいのか？となってしまうのだ。

したがって，ひとつの動詞句を作る，つまりこれらの動詞句を正しく運用するには（あるいは正しく認識するには），Tense-Aspect-Voiceそれぞれの概念を認識し，先に論じてきたように，それを数学的「順列組合せ」と同じように正しく組み合わせることができなければならない。文を生成するためには，こういう非常に複雑な思考が必要になるものなのだということを，教師自身がしっかりと認識しておく必要があるのではなかろうか。自分が母語話者のごとく自由に操れるということと，それを学習者にわかるように教えることには，したがって大きな開きがあるのである。

しかし，実際に動詞句を作成するには，どういう動詞句を作成するかを頭に描いたときの順序とは異なり（つまり，上図とは逆順に），まず主語の人称を考えたうえで時制を「現在形か，過去形か，未来か」で決め，次にAspect（相）が「単純形か，進行形か，完了形か，完了進行形か」を決め，最後に「能動態か，受動態か」を決めていくことになる。すなわち下図のようになる。

Tense　→　Aspect　→　Voice
第 1 段階　主語の人称を考えたうえで，時制Tense「現在形か，過去形か，未来か」を決める
第 2 段階　相Aspectが「単純形か，進行形か，完了形か，完了進行形か」を決める
第 3 段階　態Voice「能動態か，受動態か」を決める

その際に，動詞句における「左半丸」の助動詞部分（be, have）の「人称」と「時制」をまず決めなければならず，「右半丸」の本動詞部分（-ing, -en）の決定は最後まで保留されることになる。実際は肯定形か否定形か疑問形かがこれらよりも先に判断を迫られることになる。

また，時制の現在形は，とくにbe動詞のばあいは主語の人称が 1 人称・ 2 人称・ 3 人称単数と複数の場合にそれぞれ異なること（一般動詞でも 3 人称単数とそれ以外は異なる），過去形でも 3 人称単数の場合とそれ以外が異なることを考えると，その順列組み合わせは非常に複雑なものになる。その選択肢の中からひとつを間違いなく選択することがいかに複雑な思考過程を必要とすることなのか，ということがよく分かるであろう。

学習者は実際，そのようなところで大いに間違ってしまい，「英語って難しい」「わけがわからない」と考えてしまうのではなかろうか。これが先に「単純形はなぜ・どのように難しいのか?」で論じた点でのひとつでもある。

これは単純形だけに留まるものではないのだが，単純形で基本的な認識が出来上がれば進行形，完了形，完了進行形も同様に考えて進むことが可能である。実際に学生たちも，単純形で基本的考え方を学んだ後では，徐々に時制による間違いが減っていったことも留意すべきである。

5．3．「記号づけ」の魅力

動詞句を作成するときの頭の中では，上述のように「能動態か，受動態か」→「単純形か，進行形か，完了形か，完了進行形か」→「現在形か，過去形か，未来か」（Voice→Aspect→Tense）という順序であるが，動詞句の「組合せ順序」としては，Tense→Aspect→Voiceとなる。「記号づけ」で図示すると以下のようになる。（下図では，「過去分詞 -ed形」という旧来からの用語方法ではなく，新提案の「受動分詞 -en形」を使用した。）

	能動態	受動態
単純形	(-)	(be -en)
進行形	(be -ing)	(be **being** **-en**)
完了形	(have -en)	(have **been** **-en**)
完了進行形	(have ｜ been -ing)	(have ｜ been ｜ **being** **-en**)
	↑ Tense　↑ Aspect	↑ Voice

授業ではこれらの解説をさらに以下のように「記号づけ」によっておこなうと理解が助けられる。つまりAspectやVoiceのひとつひとつの要素をひとつの丸の中に収めることで，それらAspectやVoiceが結合してひとつの動詞句が出来上がっていることを視覚的に確認することが可能となるからである。

能動態	受動態
(-)	(be -en)
進行	進行 ・ 受動態
(be -ing)	(be (being) -en)
完了	完了 ・ 受動態
(have -en)	(have (been) -en)
完了 ・ 進行	完了 ・ 進行 ・ 受動態
(have (been) -ing)	(have (been) (being) -en)

ご覧のとおり，まず「左半丸」の助動詞（be，have）が時制（Tense）を決めるから，動詞句の「組合せ順序」はTense-Aspect-Voiceとなり，本動詞は動詞句「右半丸」の最後部で［-ing，-enとして]ようやく出て来るのである。つまり動詞句における本動詞部分［-ing，-en]は，動詞句の最後まで保留されることになる。

（また肯定形か否定形か疑問形かも，これらよりも先に判断を迫られることになることは先にも述べたとおりである。）

この複雑な認識・運用をひとまとまりのものとして提示したのが寺島隆吉（1986）に収録されている思考実験表であった。それを後藤幸子氏が修論に取り上げ，中・高校生がどれほどTense-Aspectを認識・運用できるかを調査研究したのだが，それを私が更にTense-Aspect-Voiceまですべて含めた思考実験表として追試しているというわけである。

しかし上図を見ていただくとお分かりのように，受動態の本動詞部分には「-en形」という確固たる形が与えられているが，能動態は単純形か進行形か完了形かによって「ϕ」「 -s」「-ing」「-en」というように，バラバラの形となって一定した形をもたない。これは逆に「(be＋）-en形をもたないことが能動態である」ということでもある。

すなわち，「受動態でないものが能動態である」，「受動態の要素がϕ（ゼロ）の場合が能動態である」という意味に解釈すべきなのではないだろうか。そう考えると，それぞれの動詞句の構成順序は以下のようになる。

＜表12＞動詞句の構成

	受動態	能動態
単純形	時制 ＋ 受動態 （時制be ＋ -en）	時制［＋受動態ϕ］ （時制［＋ ϕ］）
進行形	時制 ＋ 進行 ＋ 受動態 （時制be ＋ -being ＋ -en）	時制 ＋ 進行［＋受動態ϕ］ （時制be ＋ -ing ［＋ ϕ］）
完了形	時制 ＋ 完了 ＋ 受動態 （時制have ＋ been ＋ -en）	時制 ＋ 完了［＋受動態ϕ］ （時制have ＋ -en ［＋ ϕ］）
完了進行形	時制 ＋ 完了 ＋ 進行 ＋ 受動態 （時制have＋ been ＋ being ＋ -en）	時制 ＋ 完了 ＋ 進行［＋受動態ϕ］ （時制have＋ been ＋ -ing［＋ ϕ］）

このあたりを混同させてしまっていると，先述のとおり，「相と態の相関図」を提示して「この空欄④は何形でしょう。分かった人にはこの時点でS評価をあげます」と言うと，学生たちは色めきだって「過去形」「現在形」「過去進行形」「現在進行形」「現在完了形」「過去完了形」「受身形」などと，TenseもAspectもVoiceも混同して何でもデタラメに並べ立てることになる（英語教員ですらこの例外ではなかった)。

しかし学生たちは「現在進行形」「過去完了形」などと並べ立てる反面，「受身の過去形」などというようにVoiceとTenseの複合形には言及しなかった。それが不思議ではあった。が，これはこれまで学生たちが習ってきた英文法用語に，「現在進行形」や「現在完了形」は頻繁に登場してきたが，「現在受動態」「過去受動態」などという組み合わせの用語がなく，「受身形の現在」「受身形の過去」といったものだけだったからではなかろうか。これは，すべて何の関連もなくただバラバラに記憶されてきたということを物語っている。

だとすれば，これらの統合的認識のためには，思考実験表の縦軸左上部は単なる「単純形」ではなく，「能動態単純形」と表記すべきなのではなかろうか。したがって，進行形は能動態進行形，完了形は能動態完了形，完了進行形は能動態完了進行形となる。また，受動態は「受動態単純形」と表記すべきである。思考実験表の概念図はしたがって以下のようになる。

＜表13＞　時制・相•態（Tense-Aspect-Voice）思考実験表の概念図・改訂版

＜旧表記＞	＜新表記＞	肯定形	否定形	疑問形
単純形	能動態・単純形	現在形，過去形，未来		
進行形	能動態・進行形			
完了形	能動態・完了形			
完了進行形	能動態・完了進行形			
受動態	受動態・単純形			
受動態進行形	受動態・進行形			
受動態完了形	受動態・完了形			
受動態完了進行形	受動態・完了進行形			

上図のそれぞれには，現在形，過去形，未来[形]の 3 つの欄が必要だが，ここでは省いてある。このように表の左部「旧表記」を，上のような「新表記」に変えることで，頭がすっきりと整理されるのではなかろうか。

なお，「受動態の進行形」は，よく調べてみると，私自身の予想に反して，先に見たように日常的によく使われる表現法であった。しかし，＜表13＞最下段の「受動態完了進行形」は，実際の英文に登場する可能性は非常に少なく，あまり日常的にお目にかかることがない。とはいえ，全体像を掴む上では欠かせない思考実験の機会になるので，必ずここまで挑戦させてみることが必要ではないかと考えている。[註 4]

5．4．動詞句としての塊を理解させるために

ところで，動詞句の思考実験表をどうしてここまで確実に取り組みたいと考えているのか，という理由を，違った角度から再び述べておきたい。

文を読んでいるとき，動詞がいくつも並んでいる場合，それがどこで切れるのかをはっきりさせなければ文は読めない。たとえば "...has done is said..."とか，"...won't disclose is..."のように，文中に動詞が幾つもかたまって並んでいる場合，どこまでが一つの動詞句としての塊なのか，つまりどこに動詞句の終わり（切れ）が来るのかを判断できなければ，文の読みは不可能だからである。

もちろん動詞句の塊を発見できるようになったからといってどんな長文もスラスラ直読直解できるようになるとは言えないのは当然である。寺島隆吉（1986, 2000）にあるように，文のもっとも大きな切れは連結詞であること，したがって「記号づけ」ではそれを四角で囲み，その前で一旦立ち止まりつつ（つまり複文を単文に分解しながら）文を左から右に読み進むことが重要である。

直読直解できるようになるためには，このような英文の構造を知り，多くの文を読みつつ，単語量も蓄え，まさに螺旋状に読みの力をつけていかなければならない。単語をいくら覚えても，句動詞をいくつ覚えたとしても，「動詞句」が見分けれられ，センスグループの位置，単文をつなぎ合わせて複文を構成する「連結詞」が分かるようにならなければ，英語が読めるようになったという実感は味わえない。

このときに「連結詞」の次に重要なのが，「動詞句」の塊を発見することだと考えられる。たとえば，以下の文では連続する動詞句のどこに切れの位置が発見できるのか，ということが重要になる。

(12) I mean, that's an incredible statement, because really what they're saying is, we can't afford to enforce the law, because there is an economic crisis, that somehow, because there's an economic prices, legality is a luxury that Congress can't afford.

つまりそれは信じがたい発言です。なぜなら実際，彼らが言っていることは，「私たちには法を実施する余裕はない」ということです。経済危機なのだから，ともかく，経済危機なのだから，合法性など贅沢であり，議会には余裕がないと。

(13) The other thing that the Fed won't disclose is what they have accepted as collateral in exchange for these loans.

もうひとつ連銀が明らかにしようとしないのは，こうした融資と引き替えに一体何を担保として受け入れたのかということである。

(14) So, essentially, what the Bush administration has done is said, you know, "We dare you to challenge us and be responsible for the great depression."

そもそもブッシュ政権がやってきたことは，次のように言われていますよね，「我々に反対できるならしてみるがいい，大恐慌の責任を取ってもらうぞ」と。

上の(12)では，are saying isという語の連続で，isの前に切れがある。(13)では，won't disclose isという語の連続で，isの前に切れがある。(14)では，has done is saidという語の連続で，isの前に切れがある。[註５]

動詞のつながりの「どこに切れがあるのか」を発見するには，動詞句がどのような形をしているのか，つまり動詞句が先述したようにTense-Aspect-Voiceの順に組み合わされていることを認識しておくことが必要である。たとえば，(12)(13)(14)の文では，次の箇所に切れがある。

(12) ... won't disclose is ...　→　... won't disclose | is ...
(13) ... are saying is ...　→　... are saying | is ...
(14) ... has done is said ...　→　... has done | is said ...

この各例では，現在時制の is は単独で現れる（丸で囲まれる(is)）か，左半丸すなわち(is -ing)または(is -en)という組合せ以外では現れない。したがって下記の「誤例」を見ていただければお分かりのように，「丸」の末尾や中間に存在することはあり得ないので，isの直前に切れがあることが分かる。

	誤	誤	正
文例（12）	('re saying **is**)	('re) | (saying **is**)	('re saying) | (is)
文例（13）	(wo|n't |disclose **is**)	(wo)n't | (disclose **is**)	(wo|n't |disclose) | (is)
文例（14）	(has done **is**) | (said)	(has) | (done **is** said)	(has done) | (is said)

では実際，上の文を記号づけしながら左から右に直読直解で読んでいくとどうなるかやってみよう。（加えて連結詞を四角で囲むことによって，長い複雑に見える文も，単文に分解しつつ，左から右に読んでいくことができる。このことは上述の文に書き込まれた四角を見れば一目瞭然であろう。）

(12) I(mean), | that('s)an incredible statement, | because really | what they'(re saying) | (is), | we(can|'t |afford)to|enforce)the law, | because there(is)an economic crisis, | that somehow, | because there'(s)an economic crices, | legality(is)a luxury | that Congress(can|'t |afford).

つまり | それは信じがたい発言です。 | なぜなら実際 | 彼らが言っていることは | つまり | 私たちには法を実施する余裕はない，ということだからなのです。 | なぜなら経済危機があるのだから， | ともかく， | 経済危機があるのだから， | 合法性など贅沢すぎて， | 議会には余裕がないのだと。

(13) The other thing | that the Fed(wo|n't |disclose) | (is) | what they(have accepted) | as collateral | in exchange for these loans.

もうひとつ | 連銀が明らかにしようとしないのは， | こういうことです | 何を彼らが受け入れたのか | 担保として | こうした融資と引き替えに。

(14) So, essentially, | what the Bush administration(has done) | (is said), | you(know), | "We(dare)you to|challenge)us | and |be)responsible for the great depression."

そもそも | ブッシュ政権がやってきたことは， | （次のように)言われています | ね， | 「我々に反対できるならしてみるがいい， | 大恐慌の責任を取ってもらうぞ」と。

先にも述べたことだが，直読直解のためには，次の三つが分かる必要がある。
第 1 に，連結詞の前にもっとも大きな切れがあること，
第 2 に，次にどこまでが一つの塊の動詞句かを認識できること。
第 3 に，動詞句の塊がつかめたら，その塊としての動詞句の意味内容が分かること。

たとえば，is saidを，先述のように，「言った」「言いました」「言っている」と認識するようでは英文は読めない。これは，和訳する際に日本語に受動態がなじまないから受動態を能動態に訳し直すのとは訳が違うからである。

したがって動詞句の意味内容の認識を確かなものにしていくには，思考実験表の取り組みだけでは足りない。これは，思考実験表が意味よりも形をまず優先させているから当然のことではある。しかし「形の認識」なしには一歩も先に進めないのであるから，ここに来てようやく直読直解の入口に足を踏み入れたことになる。

6　縦軸へ「時制→相→態」

6．1　進行形その形式と意味

「単純形・肯定」の次に学生たちはそのまま横軸方向へ進もうとするが，そこで一旦ストップさせて，縦軸方向へ進めさせる理由については先に述べたとおりである。先の表13を次に再録しておく。

＜表13＞　Tense-Aspect-Voice思考実験表の概念図・改訂版

→ 横軸

↓ 縦軸

＜旧表記＞	＜新表記＞	肯定形	否定形	疑問形
単純形	能動態・単純形	現在形，過去形，未来		
進行形	能動態・進行形			
完了形	能動態・完了形			
完了進行形	能動態・完了進行形			
受動態	受動態・単純形	↓		

受動態進行形	受動態・進行形			
受動態完了形	受動態・完了形			
受動態完了進行形	受動態・完了進行形			

縦軸方向に行くと，肯定形の次は進行形である。言語習得理論でも進行形の習得順序はきわめて早いと言っているように，進行形の形式と意味は認識しやすいようである。しかし進行形の習得は早いとは言われているが，学生の多くは -ingそのものを進行形だと考えているようである。つまり -ingという形（すなわち，-ingだけ，be＋-ingという全体の形ではない）を進行形だと思っているというだけである。

しかし，-ingという形式と意味のあいだには大きな開きがある。実際，思考実験表に記入させてみると，進行形の現在形も過去形も，be動詞を省いてしまったIraq war killing many people.となるものがかなりあるし，未来ではほとんど全員がおしなべてwill killingになってしまい，やはりbe動詞を省いてしまっている。そこで次のような会話が進行することになる。

T：進行形は何と何を結合させるのだった？
S：be ＋ -ingです。
T：これ（Iraq war killing many people.）だと現在形も過去形も同じになっているから，どうすればいい？
T：進行形の現在はどうやって表すの？
S：そうだった，be動詞を入れなきゃ。

こうして，be動詞を入れてくれるのだが，たいていIraq war be killing many people.となる。そこで，また次のような対話になる。

T：beは原形ですよね。beの現在形は？
S：am,are,isのどれですか？
T：単純形はkillsでしょ？sが付いてますね。この主語にはbe動詞はどれがいいのでしょうか？

こうして，ようやくisを選んでくれる。だから言語習得理論で「進行形の習得は早い」と言われているが，「-ing」という形だけが認識しやすいということであって，「be動詞＋-ing形」全体の形式と意味の習得が早いのかどうかは非常に怪しい。

なぜなら，もし言語習得理論（Krashen 1981,1982,1985，迫田2002，白井2004，山岡1997）の示唆するとおり「三単現のsの習得がもっとも遅い」のであるとすれば，そのbe動詞の三単現（is）を含む進行形が，それより早く習得されることは，学生の実態から見てもかなり難しいと考えざるを得ないからである。既にみてきたように，学生はisを省いたかたちを「進行形」だと思っているし，be動詞を入れることに気づいたとしても，すぐにisを選べる学生は，少なくとも私の学生を見る限りでは多くないからである。

また進行形の肯定・未来をwill be killingと作った学生も，否定形を作る段になると，またしても，ほとんど全員がおしなべてwill not killingと，beを脱落させる。このことからしても，進行形がもっとも早い習得順序である，という指摘はますます怪しいものだと考えざるを得ない。

６．２．完了形

さらに縦軸方向に進むと，進行形の次が完了形である。完了形は学生にとってはかなり認識しづらいようである。「過去形とどこが違うのか？」これが学生たちの本音であろうか。

第１に，「～してしまった」という完了と「～した」という過去に意味の明確な違いを発見できないからだ。

第２に，完了形はhave＋-edの形であるが，先にも何度も述べたように，「-ed形」が過去形と視覚

的に同形であることから，この「-ed形」が過去分詞であると認識しにくいのである。

そこで，have＋-edを「過去形の前にhaveがついているだけ」と認識することになり，is said も，has said も，「どう違うのかよく分かりません」，ということになる。

先にも述べたとおり，is saidが「言った」「言いました」という認識だから，has saidが「言う」「言った」「言いました」となってもしかたがない。

私は完了形について説明をするときには（「君，その髪少し切ったらどう？」という皮肉を込めて）「髪はいつお切りになったのですか?」と質問し，その答えとして，I have cut my hair = I have my hair + my hair was cut (this morning). を例文として取り上げる。（その昔，ビートルズやストーンズがアメリカにやってきて記者会見を受けたときのことを思い出させる会話である。）そして次のように板書する。

<完了形の原義>

I have my hair　+ my hair was cut　(this morning).

→ I(have)my hair (cut).　　→ 私は切られた状態の髪をもつ

→ I(have cut)my hair.　　→髪は散髪した，もうさっぱりしている

I have my hair「私は髪をもっている」，my hair cutのcutは受動分詞p'（意味上の述部=predicate）であり，その直前にあるmy hairがs'（意味上の主部=subjective）であるので，「私の髪が切られた」となる。したがって「私は髪が切られた状態をもっている」→「私は髪を切った」となること，これが完了形の原義であると話す。（寺島隆吉2000:132-137）

だからこそ「have＋-ed」の「-ed」は受動分詞なのである。「過去分詞」は「受動分詞」という用語に代えるべきだし，表記法も「-ed」ではなく「-en」とすべきと考えた理由もそこにあったわけである。

（ただし現在では，この I(have)my hair (cut).という文は，「使役」の意味「私は髪を切ってもらった」が新たに発生しているので，完了形とは意味が違っている。その点は別に指導すべきである。）

しかしよく考えてみればこの例文もあまり良い例文とは言えないようである。なぜなら，cutという動詞が不規則動詞の，それもAAA変化動詞であり，このcutが受動分詞であると認識するのは難しいからである。原形かも知れないし，過去形かもしれないからである。であるとすれば，不規則動詞のABC変化動詞から受動分詞が -enのものを例文として選択すべきであった。[註６]

それはともかく，思考実験表の記入に戻ると，学生たちは「完了形現在」のところでまたもや，Iraq war have killed many people.と書く。「単純形」のところで三単現を間違えた人数と比べると，かなり減ってきてはいるが。

そこでまた，これまでと同じ質問を繰り返すことになる。「haveの三単現は？」このようなことを繰り返さねばならないなら，いっそのこと主語が複数の例文を選ぶべきだったかもしれない，と考えてしまうほどであった。

しかしこれは「思考実験」と銘打ってあるように，方程式に数字を当てはめていくように，まずは形だけでも自動的に作り上げられるようにするのが第１の目的である。だから敢えてもっとも困難な課題を提示したのだった。

私の担当している６クラス中，何のアドバイスをしなくてもスラスラ最後まで間違いなく書き上げたのは，昨年度で言えば，情報管理学科2年①クラス（上級クラス）の1名だけであった。彼女は90分で２枚目にも挑戦し書き上げてしまったが，他の学生は1枚目すら仕上がらなかった。経営学科３年③クラス（下級クラス），法学科３年②クラス（中級クラス）は優に２コマを使用した。

６．３．完了進行形

このような学習状態で，もっと高度な完了進行形に入るのはどうかと考えられるかもしれないが，

これまでは進行形・完了形などそれぞれについてバラバラに学習してきたからこそ，体系的に捉えられてこなかったのである。

ここではそれを一気に思考実験というかたちでまず形から捉えさせることを目的にしている。「形式」が習得できれば，次にようやく「意味」に入ることができる。

完了進行形の導入は，まず完了と進行を下記の左図のように少しずらして板書した。またついでに受動態完了形もあわせて解説した。（授業のこの時点では，受動分詞としての表記は「-ed形」を使用していたので，そのように記載することとする。）

完了 ・ 進行
(have -ed)
+(be -ing)
=(have been -ing)

完了・受動態
(have -ed)
+(be -ed)
=(have been -ed)

このように少しずらして並べ，その下に完了進行形の「できあがり図」(have been -ing)を学生に指名しつつ作っていくのだが，どうしてもbe動詞の-ed形が出てこないことは先に述べたとおりである。そこで，ここは無理矢理「be動詞の受身分詞はbeenですね」と私が言いつつ，have been -ingというできあがり図を完成させていった。

この板書を見ながら学生たちは思考実験表を書いていくのだが，学生の手元を見ると，下記のように書いてしまっているものが多かった。こうして，ここでもやはり「進行形は -ing」ということだけが習得されている実態を目の当たりにすることになる。

* Iraq war have killing....（少しはいる）
* Iraq war has killing....（この間違いが圧倒的に多い）
* Iraq war have been killing many people.

つまり，進行形に完了が足されるとhave killingになるというわけである。先に述べたFD研修会の際，表１の「④欄には何が入るか」について，「待ってください，あります」と言った教員は，ひょっとしたら，この完了進行形を思い浮かべていたのではないかと私はひそかに思っている。

ここでも，Iraq war have been killing many people.という誤文が出てくるが，「完了のところと同じだから」と言うと，have→hasとなり，先ほどまでよりは簡単に理解してくれる。間違う人数も激減している。難しくなるほど間違いの人数が減ってくるのがおもしろい。

しかし訂正させながら，ともかくも「完了進行形現在」「完了進行形過去」まではhas been killing, had been killingと作れたとしても，未来になると，またもや次のような答えが続出してbe動詞が欠落する。be動詞のなんと存在感のないことだろうか!!

will have killing
will has killing
will had killing

ところで私は，教材にこのような複合形が登場すると，板書するとき「完了形」「進行形」「受動態」が視覚的に浮き彫りになるように，丸で囲む部分を少しずらして記号づけして見せることにしている。

完了 ・ 進行 ┆ 完了・受動態
(have (been) -ing) ┆ (have (been) -ed)

このように記号づけすることで，完了進行形はAspect-Aspectの複合形，完了受動態はAspect-Voiceの複合形なのだということを(そのつど時間をかけてゴテゴテと説明せずとも）すっきりと認識させることが可能となるからである。その意味でも，この「記号づけ」は極めて明快な説明法だと考えている。

6．4．受動態

さて，ここまでは能動態であったが，次からは受動態である。机間巡視してみると，受動態の動詞句は現在形がis killed，過去形がwas killedとなっていて，「主語の人称を考えて書けるようになったなあ」「まあまあなんとか書いているじゃないか」と安心した。しかし，下記のように，なんと主語がIraq warのままになっているではないか!! これには実際驚くというか，参ってしまった。

* Iraq war is killed by many people.

つまり，「受動態は相関図を見て書いてね」という指示では駄目だったのだ。「受動態だということは，“殺される”となるのだから，何が主語かを考えて書いてね」と言わねばならなかったのだ。「殺す」「殺される」という強烈な動詞だからこそ，まさかそんな間違いが出るとは考えなかったのだが，文章の意味をほとんど考えずに書いていることの表れなのかもしれない。

ここで主語Iraq warに対して，不思議なことにbe動詞は適切に使われていた。ここまでの学習の成果であろうか。このあたりになると意外にもドンドン書き進めて受動態完了形まで書いてしまっている学生が続出しそのような学生は，主語が違っていたことを発見して結局全てゴシゴシ消して書き直すことになった。先に受動態完了形まで説明してあったからだった。

なお，この例文の場合，byではなくinを使ってMany people are killed in Iraq war.とするほうがよいのだが，受動態は多くの場合byによって動作主を表すことを確認するため，「本当はinの方がいいのかもしれないのだけれど」と断った上で，ここでは敢えてbyを使わせた。

今回の思考実験表の縦軸はここまでとしたが，実際は下記のような複合形（受動態の進行形・受動態の完了進行形）もある。しかし，受動態の進行形は，次の(15)(16)に示すように，実際に先に引用したナオミ・クラインの語りに何カ所も出てきた。

＜表14＞ 相と態の複合形

進行 ・ 受動	完了 ・ 進行 ・ 受動
be -ing +[be -ed]	have -ed +[be -ing] +[be -ed]
be being -ed	have been being -ed

(15) There's a few elements now that <u>are being described</u> as illegal that we're finding out.

いくつかの要素があり，違法だと言われ続けているものですが，それを今私たちは調査中です。（受動態進行形）

(16) There is another $2 trillion that that's <u>been handed</u> out by the Federal Reserve in emergerncy loans to financial institutions, to banks.

もうひとつ２兆ドルあります。連邦銀行が緊急融資で金融機関・銀行に既に手渡してしまったものです。(受動態完了形)

したがって少なくとも受動態の進行形までは思考実験表にぜひ組み込みたい。先にも，言語習得論で習得が一番早いとされる進行形においてさえbe動詞が脱落している事実，そういうbe動詞の存在感のなさを考えると，なおさら「受動態進行形」を認識させておく必要があると考えられるからである。

何故このように考えるかというと，私自身，「受動態＋進行形はあまり見かけないなあ」などとぼんやりと考えて，「受動態の完了形だけはTense-Aspect-Voice思考実験表に載せよう」と考えていたからだ。

しかし実際に，この論文を書き始めてからDemocracyNow!を読んでいると，何と至る所に「受動態進行形」が使われているではないか。これには正直驚いてしまった。例えばDemocracyNow!（以下ではDNと略記する）のヘッドラインニュースには，(17)(18)のような例があった。

(17) US War Resister Arrested Following Canada Deportation

An American war resister has been arrested after being ordered to leave Canada. Cliff Cornell is being held at a Washington state jail after surrendering at the US-Canada border. Cornell's attorney is criticizing the arrest, because Cornell had announced he intended to return to his unit voluntarily. He's being held on charges of going AWOL. Cornell fled to Canada four years ago after his Army unit was ordered to go to Iraq. (DN20090205)

戦争反対の米国人が，カナダからの国外退去命令を受け続けた後，逮捕された。クリフ・コーネルは米国＝カナダ国境で降伏した後，ワシントン州刑務所に現在も被拘束中である。コーネルの弁護士は逮捕を批判している。コーネルが自発的に隊に戻るつもりであったと発表していたからだ。彼は無許可離隊の罪で今も被拘束中である。コーネルは，彼の所属する軍の部隊がイラク行きを命令されたのち，４年前にカナダに逃亡した。

(18) Group: DirecTV Rejects Ad Critical of Israeli Occupation

The satellite network DirecTV is being accused of censorship after reportedly refusing to air a commercial critical of US backing for Israel's attack on the Gaza Strip. The spot was produced by the US Campaign to End the Israeli Occupation. It lists the number of Palestinian dead from Israeli attacks and criticizes Israel for blocking aid and supplies. It then calls for cutting US military aid to Israel, concluding, "President Barack Obama, we need a change of policy toward Israel/ Palestine." The group says DirecTV abruptly refused to air the ad after having reached an agreement.(DM20090204)

衛星ネットワーク「ディレクTV」が検閲罪で現在告訴されている。その少し前，ガザ地区に対するイスラエルの攻撃を米国が支援しているとする批判広告を，ディレクTVが放映拒否をしていたと報道されていた。「イスラエルの占領を止めさせる米国の反対運動」[反戦グループ]が制作したこの批判広告は，イスラエルの攻撃によるパレスチナ人死者数を挙げ，イスラエルが海外からの救援物資を封鎖していることを批判している。また，イスラエルへの米国からの軍事援助を削減するよう要求し，「バラク・オバマ大統領，私たちはイスラエル=パレスチナ政策の変更を求める」と結んでいる。グループによれば，ディレクTVは，放映契約を締結したあと，唐突にその広告放映を拒絶したということだ。

先述のとおり，私は英文を読んでいても，改めて考えてみるまで受動態の進行形ですら，その存在にあまり気づかずにいた。そのため初めに作成したA表からそれを削除していたという事実にも驚かされた。be being.....とあるので，このbe動詞を何気なく読み飛ばしていたということなのだろうか。（これはまた，先に何度も述べてきたように，学生が進行形や受身形などでbe動詞を必ずといっていいほど省略してしまうこととも一致している。）

一方，こうしたbe動詞の存在感のなさに反して-ingの存在感は大きい。これは先にも述べたように，-ingという形だけを進行形だと考えているということである。他方，「過去分詞 -ed形」の認識は依然として過去形と変わらないものである。だからこそ，「過去分詞 -ed形」という表記方法ではなく，「受動分詞 -en形」を提案したいのである。

７．横軸方向へ（肯定形→否定形→疑問形）

７．１．単純形の否定形

前節ではTense-Aspect-Voice思考実験表の縦軸に沿って下方向に論を進めてきたが，ここからは，横軸に沿って論を進めることになる。否定形，疑問形の作り方はいたって単純で，次の原則のみである。

否定形：動詞句を二つの部分に分け，最初の語（左半丸）の後にnotを入れる。

疑問形：この最初の語（左半丸）を主語の前に出して文末に？を付ける。

「単純形は単純ではない」ということについては繰り返し述べてきたとおりで，これは否定形を作るときにも例外ではない。むしろもっと難しいとも言える。

もちろん，doesn't kill, didn't kill, won't killと短縮形を使って正解の学生も中にいるが，かなりの学生が，次のような実にバラエティ豊かな誤文をつくる。

現在形では，is not kill，is not kills，is not killed（does not kills, do not killsもある）
過去形では，能動態であるにもかかわらず，was not killed（did not killedもある）
未来時制では，will not kills, will not killedなど

しかし，これらの誤用から分かることは次のふたつである。

（1）学生たちが「否定形を作るときには，be動詞以外は，動詞句を2語以上にしてから，最初の語の直後にnotを入れる」という原則を知っている。

（2）しかし「動詞句を2語以上にする」際には，彼らにとって馴染み深い（？）［またあるときには存在感がない］be動詞を使うことが多い。

しかし，進行形や完了形などの未来時制ではいつも欠落させてしまう語がbe動詞（be, been）であったことを考えると，これは全く矛盾していると言わざるを得ないが，非常に面白い現象である。「単純形の否定」をつくるときに必要なdo動詞（do, does, did）はなかなか使ってくれない。つまり，be動詞よりもdoという助動詞のほうが，もっと存在感がないということの証でもある。

そこで，否定形の作り方について図示するとき，先述したように「否定形を作るには，動詞句がはじめから2語以上になっているwill killが最も簡単ですね」と言いつつ，下図のように一番下にあるべき「未来　will kill」から板書する。

［未来　**will kill**　］
現在形　kill ϕ ＝do kill
　　kills＝does kill
過去形　killed＝did kill

次に「killを2語以上の動詞句にするには，killが一般動詞なのだから，be動詞ではなく，do動詞の助けを必要とします」と言いつつ，「現在形　kill ϕ ＝do kill」を板書した。そして下図の右部のように，「kill≠killであるのはなぜか」と問いかける。

現在形	kill ϕ ＝do kill	**kill** ϕ ＝do kill
	kills＝does kill	↓　　↓
過去形	killed＝did kill	**kill** ≠(do) kill
未来	will kill	

実はここが最難関である。つまり外見は同じだが，左辺のkillは現在形であるのに対して，右辺のkillは原形なのである。これを認識できるかどうかが重要なのだが，言葉で説明していてもなかなか納得してもらいにくい。

そこで，動詞句を下図のように「記号づけ」してみると，全丸(kill) と 半丸 kill) は等しくないことが一目瞭然である。(kill ϕ)は，原形 kill)とスペルは同じでも，左半丸の(do と合わさって初めてひとつの丸(全丸)になるからである。

(kill ϕ)＝(do kill)
↓　　↓
(kill)　≠(　kill)

こうして，1語の現在形を「2語で構成される動詞句」に直して，(kill ϕ)＝(do kill)と記号化してみると，下図の右側のように否定形が容易に作れることが，学生たちにも理解できると考えた。

	肯定形	否定形
現在形	(kill ϕ)＝(do kill)	(do not kill)
	(kill**s**)＝(doe**s** kill)	(doe**s** not kill)
過去形	(kille**d**)＝(di**d** kill)	(di**d** not kill)
未来	(will kill)＝(will kill)	(will not kill)

ではここまで説明して学生は否定形が作れたか。板書では上図右側の解答を書かずに取り組ませた。するとやはり，学生の多くが，次のような否定形を「うっかり」作ってしまっていた。

does not kills
did not killed
did not kills
will not kills

そこで「どこが間違っている？」と言いつつ不等号を入れて下図のように板書で確認すると，等号として数式が成り立たないことに気づいてくれたようだ。つまり，三単現のs，過去のdの数は，否定形・疑問形になったからといって，増減してはいけないのだということを認識してくれたようなのである。

	肯定形	否定形
(kills)≠(does kills)	(kills)→	* (does not kills)
(killed)≠(did killed)	(killed)→	* (did not killed)
(will kill)≠(will kills)	(will kill)→	* (will not kills)

一つの動詞句を肯定形から否定形に変えても，動詞句の構成要素(-s，-d)は増減してはいけない，時制や人称を表す語が増減してはいけないのである。

たとえば上図の(does not kills)は，実際はdoesもkillsも(-s)のかたちになっているので，doesは左半丸で囲めてもkillsは右半丸で囲めない。なぜなら，killsは「三人称単数現在」ということだから，単独で独立した動詞すなわち「全丸」でなければならないからである。記号づけするなら半丸ではなく全丸になる。

つまり，下図右端のように，kills，killedは単独で完結した現在形・過去形になってしまい，丸で囲むことになる。これだけで一つの動詞句を成立させてしまい，論理矛盾が起こるか，あるいはnotでいったん文が切れることになってしまう。

(does not kill)	* (does not kills)	*(does not ｜(kills)
(did not kill)	* (did not killed)	*(did not ｜(killed)
(will not kill)	* (will not kills)	*(will not ｜(kills)

「動詞には未来形がない」ことは先にも述べたとおりだが，「(do kill)における助動詞doの時制は何か？」という問いも実は面白い。同様に，「doesは？didは？willは？」という問いも可能である。doesは現在形，didは過去形だが，動詞には未来形がないので，未来時制を表すときには，willという助動詞（じつはその現在形）に動詞原形をプラスするのである。

このように，実に単純形は単純ではない。とくに三単現のsは言語習得論のいうとおり，ゆっくり時間をかけて習得する以外にないのであろう。（つまり作文や会話においては誤用しても何ら問題はないが，読み書きの作業をおこなう際には，動詞句をこのように分析的に理解できるようになってほしいのである。）

７．２.「複合形」の否定形

さて「単純形」の次は「複合形」の否定である。進行形→完了形→完了進行形の順に考えさせる。「否定形は動詞部分を２語以上の動詞句にしてから，最初の語（左半丸）の後にnotを入れる」ので，単純形を終えてしまえば理論的には簡単なはずである。

ところが次々に誤用が登場した。もっとも多かった誤用は未来時制だったが，これは肯定形のときと全く同じ現象である。どうしてもbe動詞が抜けてしまうのだ。肯定形のときのそれぞれの誤用は，

否定形の誤用を再生産するのである。

未来進行形　*Iraq war will not killing many people.
未来完了形　*Iraq war will not killed many people.
未来完了進行形 *Iraq war will not have killing .....

上記のように，三分の二以上の学生がbe動詞（be, been）を欠落させるのは，何度も繰り返すことになるが，かくもbe動詞は存在感がないからである。それ以外にも，次のようなnotの位置の誤用，複合的な誤用があった。

未来完了形の否定　*Iraq war will have not killed many people.
未来完了進行形の否定 *Iraq war will not have killing many people.
*Iraq war will have not killing many people.

また完了形•完了進行形の否定では，次のように書いた学生もいた。

完了形　*Iraq war does not have killed many people.
*Iraq war did not have killed many people.
完了進行形　*Iraq war does not have been killing many people.
*Iraq war did not have been killing many people.

この学生は「do not haveとhave not，どっちも見たことあるような気がするので，どっちも意味は一緒ですか？」と考え込んでいた。これはhave が一般動詞として使われる場合と，完了形を作る助動詞として使われる場合を混同しているのである。このような混同をするのは，一般動詞の否定形も完了形の否定形もほぼ頭に入っている，かなり優秀な学生である。

一般動詞としてならdo not haveであり，完了形などの助動詞としてならhave not 〜であるが，一般動詞としても，American Englishではdo not have，British Englishではhave not，しかし現代では英国でもdo not haveを使う傾向があるという知識がもし少しでもあれば，余計に紛らわしくなるからである。

ところで，この思考実験表の縦軸において，進行形より下方向は，単純形とは異なり，動詞句がすでに2語以上になっている。したがって「否定形は動詞句の最初の語（左半丸）の後にnotを入れる」つまり「(＿＿not＿＿)のかたちにする」という原則に従えば，何も考えなくても否定形が出来上がるはずである。

	肯定	否定
未来進行形	Iraq war(will be killing)many people.	→Iraq war(will not be killing)many people.
未来完了形	Iraq war(will have killed)many people.	→Iraq war(will not have killed)many people.
未来完了進行形	Iraq war(will have been killing)many people.	→Iraq war(will not have been killing)....

しかし，学生は左から右に書き写す際，「見事に」と言っていいほど，必ず何かを脱落させる。そのような学生に限って，動詞句を左半丸と右半丸できちんと囲んでいなかった。きちんと記号づけしていた学生は，誤用が多かった未来時制でも間違いが圧倒的に少なかった。

これらの点は受動態についても同様であった。ここでは誤用の多発する未来時制（正解)のみを例に取ったが，実際に記号づけをしながら表を完成していくと，(＿＿not＿＿)というかたちが縦軸に沿って規則的に連続していることがAppendix 1のように視覚的にくっきりと浮かび上がり，否定形がどんな形をしているのかをはっきりと確認できる。（この表では，また疑問形がどんなかたちをしているのかを含めて思考実験表の完成図を載せておく。）

学生の中には面倒くさいのか，Iraq war(will not have been killig)many people.のように，動詞句の始まりと終わりの一部だけを括弧でくくるように囲むものもいるが，このような囲み方をしている限り，動詞句の全体像が浮かび上がって見えてこない。だから先述のとおり，否定形の原則も見

えないし，疑問形も作れない，ということになってしまうのである。

７．３．疑問形

さて，さらに横軸方向に進むと，最後の疑問形の欄である。

疑問形は下図のように「動詞句の最初の語(左半丸)を主語の前に出して文末に？を付ける」という原則だけで済む。つまり左半丸と右半丸で主語を挟むことになる。

(Does Iraq war kill)many people?
(Did Iraq war kill)many people?
(Will Iraq war kill)many people?
(Is Iraq war killing)many people?
(Was Iraq war killing)many people?
(Will Iraq war be killing)many people?
(Has Iraq war killed)many people?
(Had Iraq war killed)many people?
(Will Iraq war have killed)many people?
(Has Iraq war been killing)many people?
(Had Iraq war been killing)many people?
(Will Iraq war have been killing)many people?

ここまで来ても依然として，be，beenの欠落はやはりどうしても起こる。しかし，きちんと記号づけができている学生は，難なくスムーズに書き進めていく。他方，面倒くさがり屋で記号づけをきちんとしなかった学生は，ここにきて又もや時間がかかってしまう。「初めは一歩ずつ，後は順調に」か，あるいは「初めいい加減，後は後手後手」か，を地でいくような有様である。

学生から「notはどうすればいいのか」という質問をしばしば受けた。「notの前の部分だけを主語の前に出すんだよ」と言いつつ見て回ったが，あっと驚く解答例を発見した。動詞句の全てを主語の前に出すというものであった。この学生は下図のように「動詞を前に出す」だけを実践したのだ。

*(Does kill)Iraq war many people?
*(Will kill)Iraq war many people?
*(Is killing)Iraq war many people?
*(Was killing)Iraq war many people?
*(Will be killing)Iraq war many people?
*(Has killed)Iraq war many people?
*(Had killed)Iraq war many people?
*(Will have killed)Iraq war many people?
*(Has been killing)Iraq war many people?
*(Had been killing)Iraq war many people?
*(Will have been killing)Iraq war many people?

これほどの珍答ではないにしても，完了進行形の疑問形では，左半丸の中身が一つ以上になっているものも意外に多くあったのには驚いた。完了形や完了進行形など，動詞句（丸の中身）が３つ以上になる場合にとくに多く見られる間違いだった。

* (Will have Iraq war killed)many people?
* (Has been Iraq war killing)many people?
* (Had been Iraq war killing)many people?

記号づけするとき，下図のように，最初の助動詞部分（左半丸）にきちんと縦線を入れさせておけば，このような誤用を防ぐことができたかも知れないと，今は考えている。

* Iraq war (will | have killed)many people.→(Will Iraq war have killed)many people?

私はこの思考実験表をテストとしてではなく，途中でミスを発見したらそのつど説明と訂正を加えていく方式でおこなった。もしそのようにしなかったならば，もっと奇想天外な誤用が大量に出たに

ちがいない。それはそれで有用な資料となったであろう。

しかし私の学生たちの多くが，もしそのつど説明と訂正を加えていかなければ，最後まで埋めきるところまで決して到達しなかっただろうと想像できるのである。なぜなら，これでも，ほとんどのクラスで丸々２コマを要したからである。

それはともかく，このようにして全員が何とか最後まで到達した。完成したら点検を受けて帰ることになっていたので，２限目の授業では，なかなか昼休みに入れない。１時までかかるクラスもあった。学生も頑張って大変だったが，教師も昼食抜きである。

「手が疲れた」「もうだめだ，手が痙攣する」「こんなに字を書いたことはない」と言いつつも，学生たちは何か満足そうだった。彼らにとって何か得るものを感じてくれたのではないかと思う２コマであった。

この授業では１コマ中に２枚目まで進んだ学生がいたことは先に述べたとおりだが，授業後，何人かの学生が「もう一回やりたいのでもう１枚ください」「先生，２枚目ください」と申し出てきたり，数日後になってもまた，「私にもください」という学生が複数いたことも，それを証明しているのではなかろうか。

＜補節＞　「受動分詞 -en」という用語は妥当か

１　過去分詞ではなく「受動分詞」に

ここまで後藤幸子氏による思考実験の追試として，「Tense-Aspect-Voice思考実験表」をどのように授業で扱ったのかを述べつつ，同時に，文法用語として一般的に「過去分詞 -ed」と呼ばれているものを「受動分詞 -en」と呼んだほうが論理的にも適っているし学習者にとっても理解しやすいのではないか，という点について述べてきた。それに伴って「現在分詞」を「能動分詞」と表記することの利点についても述べてきた。

また，単に「現在分詞」という用語を「能動分詞」という用語に変えることに留まらず，表12で提示したように，文全体をまず能動態であるか受動態であるかに大きく二分してとらえることが，個々の動詞句の文法項目の理解というレベルを超えた全体の理解につながるものなのだという点をも論じてきた。

私は先に「動詞の数という数量的な点から言えば，受動分詞(通常の過去分詞)は -ed 形のものが圧倒的に多いのは事実であるが，日常的に使用する動詞の使用頻度および認識しやすさの点から言えば，明らかに -en 形という表記のほうが合理的ではないか」とも書いた。

しかし，「過去分詞」を「受動分詞」，「 -ed」を「 -en」と表記する根拠については，まだ充分に説明してはいない。もちろん「 -en」と表記すれば，過去形の「 -ed」と視覚的にもはっきり異なり，過去形と間違えるという紛らわしさを一掃することが可能であるが，「 -en」という表記には英語史的観点からみて真に妥当性があるか，という点が問題である。

従来，なぜこの受動分詞を「過去分詞」と表記してきたのだろうか。この点については，「過去分詞」という用語は，単に past participle の和訳であり，-ing 形を現在分詞と命名したことから当然に帰結した結果であると想像される。

インターネット辞書のWikipediaには，Participles in Modern English（現代英語における分詞）として次のような記述がある。(http://en.wikipedia.org/wiki/Participle)

> English verbs have two participles:
>
> 1. called variously the present, active, imperfect, or progressive participle, it is identical in form to the gerund; the term present participle is sometimes used to include the gerund. The term gerund-participle is also used.
>
> 2. called variously the past, passive, or perfect participle, it is usually identical to the verb's

preterite (past tense) form, though in irregular verbs the two usually differ.

［英語の動詞には二つの分詞があり，

一つめは現在分詞・能動分詞・未完了分詞・進行形分詞とさまざまに命名されている。動名詞とかたちが同じである。現在分詞という用語は動名詞を含んだものとして用いられることもあるが，動名詞分詞という用語も用いられている。

二つめは過去分詞・受動分詞・完了分詞とさまざまに命名されている。通常は動詞の過去形とかたちが同じである。しかし不規則動詞においては，通常その２者はかたちが異なる。］

以上の説明から，次のような１対１対応になっていることがわかる。であるとすれば，「進行形分詞」には対応するものがないので除くとして，それぞれの組み合わせのどれをとって命名しても良いことにはならないだろうか。

現在分詞　・　能動分詞　・　未完了分詞　・　進行形分詞
↓↑　　↓↑　　↓↑　　↓↑
過去分詞　・　受動分詞　・　完了分詞　・　ϕ

現在の文法用語として使われているのが上図の最初の組み合わせということになる。だとすれば，それが教育的に分かりやすければ，２つめの組み合わせ「能動分詞・受動分詞」でも良いのではないかということになる。

現在分詞	能動分詞	未完了分詞	進行形分詞
↓↑	↓↑	↓↑	↓↑
過去分詞	受動分詞	完了分詞	ϕ

この「能動分詞・受動分詞」という用語に関して，エスペラント語においては，分詞はまず能動分詞と受動分詞とに分けられる（http://ja.wikipedia.org/wiki/分詞）ということを知れば，なおさら「能動分詞・受動分詞」という用語の方が良いように思えてくる。

また，受動分詞（従来の過去分詞）は，ラテン語では「完了分詞」，アラビア語では「受動分詞」と表記するという。このような観点からいっても，能動分詞・受動分詞という用語には，かなりの妥当性があると言えよう。

先にも述べたように，学生たちは受動分詞が見分けられないので，受動態を認識できない。その原因が「過去分詞」という用語にもあるのではないかというのが私の仮説である。なぜなら先に何度も述べたように，受動態についてはいつも下のような堂々巡りになってしまうからである。

「is saidは？」 → 「言った」,
「過去形なの？」 → 「言いました」,
「それだと丁寧形になっただけでやっぱり過去形ね」 → 「言う」「言った」,
「be＋-ed形は何だったっけ？」 → 「んー」,
「-ed形はなんて言うんだった？」 → 「過去形」,
「いつもの表ではどうなっている？」 → 「受身形だ」,
「それならis saidの意味は？」 → 「言った」･･･

これは寺島隆吉が定時制高校に勤務していたときの会話とそっくりで（寺島隆吉1986：21-24. ここには「行く」を過去形にするとどうなるかと聞いたところ「行かない」と答えるので唖然としたという対話も載せられている），英語学習の場面では，何処でも同じことが延々と繰り返されているのではないかと想像される。

日本語に迷惑の受身以外は存在しないという事実があることも先述したとおりである。しかし何度

も述べているように，学生の間違いのもう一つの理由は，この「過去分詞」という用語にあるのではないか。また「 -ed形」という形に引きずられるが故に，「過去形」との区別ができないのではないか。

こう考えると，既に述べたように，「過去分詞」という「過去形と間違えるような用語」はどうしても変えたいし，変えるべきだと思うのである。「受動分詞」という命名にすれば，不当な命名法の海で溺れる学習者を救うことが可能になるのではないかと考えるのである。

2　-ed でなく， -en という表記に

次に，規則動詞を基準とした理由，「 -ed 形でなく， -en 形という用語に」の妥当性について考えてみた。

たしかに規則動詞 -ed は数が圧倒的に多い。しかし，不規則動詞が不規則動詞として存在し得るということ自体が，不規則動詞の重要性を意味しているとは言えないだろうか。つまり，日常的に頻繁に使用するからこそ，他に代え難く，したがって不規則なものをそのまま維持し，正確に記憶し，間違いなく使用することが可能なのである。

インターネット辞書ウィキペディアでも「不規則動詞」の項に，「とくに頻用され，その言語における基幹的な動詞が不規則である場合が非常に多い」と記している。

不規則動詞のなかでももっとも不規則な変化をするのがbe動詞である。他の動詞はもはや人称や数による語形変化を消滅させてしまっているが，be動詞は依然としてそれを残している。

[be (am, is, are) - was, were - been]

もうひとつhave動詞は現在形のみ語形変化を残す。

[have (has, have) - had - had]

つまり，不規則なものほど日常的に頻繁に使われていることの証である。つまり，不規則動詞こそが，その命名とは異なり，生活における基本動詞なのではないか。だとすれば，不規則動詞は歴史的にどのような変化をたどってきたのであろうか。

インターネット辞書 wiktionary でpast participleを検索してみた。そのUsage notesとしては次のような記述があった。(http://en.wiktionary.org/wiki/past_participle)

> In English, the past participle of a regular verb ends in -ed, and has the same spelling of the past tense of that verb: sometimes the last consonant is doubled (stop → stopped); sometimes the last vowel is changed (deny → denied). Irregular verbs tend to end in -en (see Appendix:Irregular verbs).
>
> 「英語では，規則動詞の過去分詞は -ed で終わり，過去形と同じ綴りをもつ。最後の子音が重ねられることも(stop → stopped)，最後の母音が変化することも(deny → denied)ある。不規則動詞は -en で終わる傾向がある。」

この記述には「不規則動詞は -en で終わる傾向がある（Irregular verbs tend to end in -en.)」と記されている。つまり，不規則動詞は，いったん「不規則」と命名された途端に，この -en形で終わる動詞群が基本的（regular）なものではないという認識ができあがってしまったのはないか。その命名とは異なり，日常的に頻繁に使われる非常に重要な語であるということは，先に述べたとおりである。ではいわゆる「不規則動詞」の中で -enのものはどれくらいあるのだろうか。それを一覧表にしたものが末尾に示したAppendix2・3である。[註７]

おわりに

ここまで動詞句を運用することがいかに難しい思考過程を経ておこなわれるものなのかを，思考実験表を使った授業実践を概観しつつ，統計処理ではなく，一種の思考実験で検証してきたつもりであ

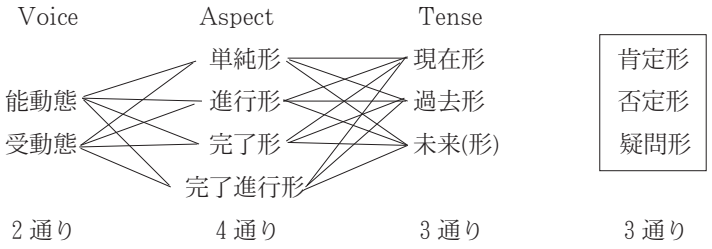
る。つまり，この「相と態の複合形」をつくりだす作業がいかに難しい思考操作であるかを検証し，私たち英語教師は，そのことを理解した上で英語を教えねばならないのだという，当たり前だが重要な観点に焦点を当ててきたつもりである。

しかし，動詞句の適切な運用には，これまで述べてきたTense-Aspect-Voiceが適切に運用できることだけで事足りるわけではない。なぜなら助動詞と呼ばれる数々の語（たとえばcan, may, must など）が，これまで述べてきた「動詞句」に足される場合もあるからである。

先に示した「相と態」の相関図に，これらの助動詞を加えた概念図を図示してみると次のようになる。

＜表16＞助動詞

現在形	過去形	その他
can	could	be able to
may	might	
must	had to	have to
will	would	be going to
shall,	should	(ought to)



このように，もともと２×４×３×３＝72であったものに，枠の中の助動詞がさらに加わることになると考えるだけで気が遠くなりそうである。例えば次のように，「その他」の助動詞と合わせて使われることもあるからである。

will have to ...　〜しなければならないだろう
will be able to ...　〜できるだろう
may be able to ...　〜できるかもしれない

このようなことを考えながらDemocracy Now!(Headlines News 20090901)を読んでいたら，be going to have to ...（〜しなければならないだろう）という組み合わせも使われていた（will have to ...があるのだから当然ではあろうが)。その例ひとつを載せておく。

According to the New York Times, Gen. Stanley McChrystal's new report calling for an overhaul of the US war strategy in Afghanistan could form the basis on which President Obama decides to send more troops to fight. The classified assessment submitted by McChrystal on Monday did not request additional US troops, but officials and analysts said it effectively laid the groundwork for such a request in coming weeks.

Michael O'Hanlon of the Brookings Institution: "We're going to have to find some additional resources in other ways, and that may mean more Afghan troops, it may mean more NATO troops from other countries, or it may mean more Americans."

The US currently has about 65,000 soldiers in Afghanistan, more than half of whom have been deployed since President Obama took office in January. August was the deadliest month of the war for US troops since the invasion of Afghanistan almost eight years ago. In the first eight months of this year, 182 US personnel have died there, compared with 155 during all of 2008.

ニューヨークタイムズ紙によれば，スタンレー・マックリスタル司令官が出した「アフガニスタンにおける米国の戦争戦略の見直しを要求する新しい報告書」をもとに，オバマ大統領は兵員のさらなる増派を決定することができるものである。月曜日にマックリスタル司令官が提出した極秘の戦況分析は，表立っては米軍のさらなる増派を要求するものではなかったが，当局並びに識者によれば，近いうちにそのような要求をするための実質的な土台作りだと見られている。

ブルッキングス政策研究所のマイケル・オハンロン：「われわれは他の方法でも増派の要員を見つけなければならなくなるだろう。たとえばアフガン兵を増やすとか，他の国からNATO軍を増やすとか，あるいはそれが

得られなければもっと米兵を増やさなければならなくなるだろう。」

米国は今のところアフガニスタンに約6万5千人の兵士を派遣している。その半分以上はオバマ大統領が1月に就任してから派遣されたものだ。8月は8年前に米国がアフガニスタンに侵略して以来，米国兵士にとって最悪の月だった。今年の8ヶ月間で182人の米兵が死亡した。ところが昨年2008年の死者は155人だった。〕

ことほどさように，動詞句の適切な運用には複雑な数学的思考を必要とするものなのだが，それをほとんど教師は自覚していない。というよりも，私自身がこの思考実験をおこなってみて初めて，「相と態の複合形」がいかに複雑な思考過程を経ておこなわれているかを再確認したのだから当然とも言えよう。

しかしこのように動詞句の思考実験をおこなってきたからといって，何もすぐにそれを作文指導に結びつけようとか会話指導に結びつけようと考えているわけではない。私が当面目指しているのは「読み」である。「読み」の力を伸ばさなければ，作文指導も会話指導も，砂上の楼閣だからである。

ではなぜ，動詞句作成の思考実験をおこなったのかというと，つまり動詞句の全体像がどのようになっているのかを学生に捉えさせたかったからである。特に受動態を形式も意味もともに認識できない学生がほとんどであることを考えると，なおさら必要であろう。

それはともかく，この思考実験によって，学生たちの動詞句にたいする認識はかなり深まったのではないだろうか。授業でも毎時間の宿題として(1)動詞句を丸で囲む，(2)連結詞を四角で囲む，を課してきており，授業では，まずその解答をしながら各自の「読み」を確かめる作業をおこなっている。したがって思考実験で考えたことが，そのまま生きて働いている。

しかし一方で，この思考実験は「形式中心」であったことも否めない。その欠陥がもっとも如実に表われたのが，やはり受動態についてであった。学生たちはせっせと形式を整えることに躍起になって，be killed（殺される）の主語をそのままIraq warにしていた。これは教師の意図とは異なり，学生たちがあまり意味を考えずに形式を追い求めたからであったと考えられる。

だとしても，それも当然であろう。なぜなら，動詞句の思考実験自体，あまりにも複雑な過程を経なければならないので，これまでこうした統合処理について総合的に学んだ経験がなければ，その処理に全神経を集中させなければならないのは致し方ないことであるからである。それを私自身，実際にこの小論をまとめるにあたって実感したからである。

したがって，今にして思うのは，逆に複合形を和訳する手順を考えさせたり，日本語における動詞の複合形（たとえば，「して＋やる」「して＋もらう」「して＋しまう」）の作り方を実際に学生たちに考えさせるという思考実験をおこなう必要があったのではないかという点である。今回は時間がなかったので，そこまで取り組めなかった。（機械翻訳もこれと全く同じ作業をおこなっているに違いないのだから）今後の課題である。〔注8〕

Notes

１．「授業ファイル」は，学生にあらかじめ配布してあるので全員がもっている。その裏表紙にこの「相と態の相関図」を書き込ませ，必要なときにはいつでも参照できるように指示した。したがって全ての学生のファイルにはこの表が書き込まれている。

ところで私は授業では市販の教科書を使用せずに，プリントをあらかじめ20-30枚ぐらいの単位で配布したり，あるいは授業によってはその都度プリントを配布する場合もある。また年度当初には全員にこの授業ファイルも無料配布し，授業で私が配布する全てのプリントを綴じさせることにしている。したがってプリント配布の際には必ずパンチで穴を開けて配布する。こうすることで配布プリントの散逸が防げ，「何ページを開いて」と授業がし易くなる。またこのファイルは学生自身がこれまでの授業を振り返ることのできる一種のポートフォリオの役割も果たすことになる。これについては寺島美紀子2009を参照。

２．また，今後のことを考えると，実際には，過去形と受動分詞[過去分詞]が形の上でも異なる動詞を選んだ方がよかったのだが，この時点ではまだ，受動分詞の表記として「 -en 形」が適しているとまでは考えていなかったので，そうした良い例文を考えつかなかった。今であれば，たとえば，USA gives "democracy" to every country.（米国は全ての国に括弧付きの「民主主義」を与える）とか，USA forgets the promise of liberty, equality, and the pursuit of happiness for all the people in the USA.（米国は全ての人民への，自由•平等・幸福追求の約束を忘れている）などが考えられるかもしれない。しかしまた文例が長すぎて思考実験表に埋めきれない事態も出て来るので，短く，かつ考えさせられる面白い例文を考えるのは至難の業である。

３．受動態の認識以外にも，学生にとってはThere is構文の認識が非常に難しい。その都度，説明すれば「あー，そうか」という感じで訳してくれるのだが，実際の文章中で意味をすぐに確認できる学生はほとんど皆無と言って良い。そこで，その対策として，１年生入学時当初には，歌There's A Hole!を使っている。これは歌でもあり，何度もThere's…が登場するのですぐに覚えてしまう歌で，しかも旧情報に次々と新情報が積み重ねられて，いきなり文がどんどん伸びていく「積み重ね歌」になっていて，まさに英語らしい情報構造になっている。またリズムの等時性を教える教材としても有効である。（これについては寺島美紀子[1990]を参照。）したがってこれは入学当初の授業展開として非常に有効な教材であると考える。この歌はリズム読みをさせながら授業で扱うので，学生にとっては，いやでも覚えてしまうことになる。にもかかわらず，この歌を暗唱し終わった後でさえ，There's構文の理解がやはり圧倒的に劣ることは，やはり特記しておきたい。

４．また，「受動態完了進行形」は，登場する可能性は少ないとは言え，実例としては次のようなものがある。
A battery has been moving the machine since 2000.「ひとつの電池がその機械を2000年以来ずっと動かし続けている」→The machine has been being moved by a battery since 2000. 「ひとつの電池で，その機械は2000年以来ずっと動かされ続けている」

５．これらの文は２行•３行に渡っているので一見すると難しい文章のように見えるが，これはDemocarcyNow!でナオミ•クラインがインタビューに応じて話しているのを文字起こししたものである。したがって耳で聞いている限りでは，特別に難しいわけでもない。ただ内容的には米国の経済危機に対処するとされる財政緊急援助についての話題なので，そうした経済用語についての知識・理解は必要ではある。

６．たとえば，Palestinian people have their houses broken by Israel.（パレスチナ人は家をイスラエルに破壊されてしまった）などの文では，完了形にするとPalestinian people have broken their houses.となってしまい，おかしな話になってしまう。
I have a piece of paper blowen by the wind.→* I have blowen a piece of paper by the wind.
Palestinian people have their houses broken by Israel.→* Palestinian people have broken their houses by Israel.
He had his love letter written by my friend Cyrano de Bergerac.→* He had written his love letter by my friend Cyrano de Bergerac.
註1でも書いたが，思考実験表に使用すべき良い例文はなかなか見つからなかった。しかし，今から思うと，寺島隆吉（2000:132-137）にあるように，ピート・シーガーの名曲「花はどこへ行ったの」の一節 "Young girls have picked them everyone." の方が良かったかも知れない（ただし主語が単数でないという問題点は残るが）。

７．英語は歴史的に見れば，それまではフランス語・ドイツ語などのインド・ヨーロッパ語族の特徴である名詞•代名詞・冠詞の性や格をほぼ消滅させてしまい，格の代わりとなる意味の表示を語順に頼らざるを得ず，それによって英語は語順がSVOに固定した歴史を持つ（レン1980）。語順が固定化したにもかかわらず，もっとも日常的に頻繁に使うが故に，人称代名詞は，かつての格変化をそのまま残している。それを一覧表にしてみたのが次

表である。

	人　称			主　格	属　格	対　格	所有格
人称代名詞	単数	1		I	my	me	mine
		2		you	your	you	yours
		3	男性	he	his	him	his
			女性	she	her	her	hers
			中性	it	its	it	its
	複数	1		we	our	us	ours
		2		you	your	you	yours
		3		they	their	them	theirs
疑問	単複同形	人		who	whose	whom	whose
		物		which	whose	which	whose

これは動詞においても，日常的に頻繁に使われるからこそ不規則動詞が基幹をなす動詞であることを考えると見事に符合している（最近は，先にも挙げたように，人称代名詞も上手く発音できない学生が少なくなくなってきた。したがって，これまでの学習の総復習として，この表を人称代名詞の思考実験として学生に作りあげさせるのも面白いだろう）。インターネット百科事典ウィキペディア「古英語の文法」では，「不規則動詞」をドイツ語の「強変化動詞」,「規則変化動詞」を「弱変化動詞」に対応するものとして，次のように述べていた。

> 古英語の動詞には強変化動詞と弱変化動詞の二種があった。強変化動詞の活用は，語幹の母音交替(アプラウト)を伴い，現代英語ではsing/sang/sung,swim/swam/swumなどの不規則変化動詞に相当する。弱変化動詞は過去形と分詞に接尾辞を付し，現代英語ではwalk/walkedやlook/lookedなどのいわゆる規則変化動詞に相当する。しかし以前は強変化動詞だったものが，弱変化動詞の形成の容易さ(語幹変化ではなく語尾変化)によって現代英語では規則変化動詞になったものが多くある。さらに，名詞からの派生語や他言語から借入された動詞も同様に語尾変化を付するのみとしたことから，現代英語では規則変化動詞は多数を占める状況となっている。(http://ja.wikipedia.org/wiki/古英語の文法)

8. ここまで書いてきて，改めて手元にあった「生徒の素朴な疑問に答える」といった文献や，英語史関係の文献を読み直してみた。しかし，これらを読み直してみても，今までに書いたことを修正する必要を認めなかった。それどころか，これまでに私たちが考えてきたこと・主張してきたことの正しさを，改めて確認するに到った。

例えば，「生徒の素朴な疑問に答える」の関係では，太田垣(1992)『先生に聞けない英語の疑問』，大槻 (1993)『英語の疑問に答える』，酒井(2005)『英語のしくみが見える英文法』，若林(1990)『英語の素朴な疑問に答える36章』を，英語史の関係では，安藤(2002)『英語史入門』，遠藤(1992)『英語史で答える英語の不思議』，岸田ほか(2002)『歴史から読み解く英語の謎』，児馬(1996)『ファンダメンタル英語史』，中尾・児馬(1990)『歴史的にさぐる現代の英文法』などを読んでみたのだが，それらを読めば読むほど，次のような思いを強くした。

(1)英語は欧州言語の一つの「方言」にすぎず，それらのほとんど全ては同一言語の系統に属する。
(2)「完了形」の生成過程を見れば分かるように英語は特にドイツ語の影響力を強く受けている（Appendix 4 ）。
(3)したがって，EUの言語政策CEFRでは「自分の母語の他に必要に応じて近隣諸国の言語を最低二つは習得すること」を主張しているが，それは日本人が全く違う系統の言語を習得するのとは全く事情が違う。

ところで「英語が特にドイツ語の影響力を強く受けている」という点について，安藤(2002：96-97)は，「OEでは完了を表す形式として『have＋目的語＋過去分詞』の構造が使用されていた」「過去分詞は[後置修飾の]形容詞として屈折し目的語と性・数•格において一致していた」としつつ，二つの例をあげた上で，そのページ下の註で次のように述べている。非常に興味深く思われたので，下記に引用しておきたい。

> しかし，OEでも既に過去分詞が屈折しない用法が始まっており，屈折する用法は少数派であった。ドイツ語では，今日でもこの語順が普通である。
>
> (i) Ich habe den Brief geschrieben.　'I have the letter written.'
>
> 今日の英語でも，このような古い語順は普通に見いだされる。
>
> (ii) a. I have a revolver loaded.　(ピストルに弾が込めてある)
>
> b. I have no money saved.　(少しも貯金をしていない)
>
> c. They had their plans made.　(計画を立て終わっていた)
>
> いずれも結果状態を表す。この形式は「完結完了相」(conclusive perfect)と呼ばれることがあるが，これらは現在時制の一用法で，発話時における主語の状態を示すもので，完了相とは言えない。

また，これらの文献を読んでいて，もうひとつ興味深かったのは，「個体発生は系統発生を繰り返す」ということを英語史でも確認できたことである。というのは英語が助動詞のあとに否定詞notを置いて否定文を作るに

到るまでには，単に否定詞ne，notを動詞の前または後に置くという前史を持っているが，これは母語話者が否定文を習得する過程と全く同じだからである。

References（Books）

安藤貞雄 (2002)『英語史入門：現代英文法のルーツを探る』開拓社
太田洋・金谷憲・小菅敦子・日臺滋之(2003)『英語力はどのように伸びてゆくか―中学生の英語習得過程を追う』大修館書店
太田垣正義・編 (1992)『先生に聞けない英語の疑問』南雲堂
大槻博 (1993)『英語の疑問に答える』旺史社
遠藤幸子 (1992)『英語史で答える英語の不思議』南雲堂フェニックス
岸田隆之・早坂信・奥村直史 (2002)『歴史から読み解く英語の謎』教育出版
児馬修 (1996)『ファンダメンタル英語史』ひつじ書房
後藤幸子（2009）「中学校英語教育の改善：文法指導の「幹」と「枝葉」」(岐阜大学大学院教育研究科修士論文）
酒井典久 (2005)『英語のしくみが見える英文法：ネイティブのセンスに迫る！』文芸社
迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
白井恭弘（2004）『外国語学習に成功する人，しない人―第二言語習得論への招待―』岩波書店
鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波新書
鈴木孝夫 (1985)『武器としてのことば』新潮社
鈴木孝夫 (1995)『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書
寺島美紀子 (1987)『英語学力への挑戦』三友社
寺島美紀子 (1990)『英語授業への挑戦』三友社
寺島美紀子 (2002)『英語直読直解への挑戦』あすなろ社
寺島美紀子 (2009)「Dramatic Readingの授業構築―AV教室•無線LANを利用した大学における英語授業実例―」『情報学研究』第18巻:1-37．朝日大学情報教育センター
寺島隆吉 (1986)『英語にとって学力とは何か』三友社
寺島隆吉 (2000)『英語にとって文法とは何か』あすなろ社
寺島隆吉 (2002)『英語にとって音声とは何か』あすなろ社
寺島隆吉＆寺島美紀子 (2004)『センとマルとセンで英語が好きに変わる本』中経出版
中尾俊夫・児馬修・編 (1990)『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店
ヴィゴツキー，レフ・セミョノヴィッチ(柴田義松 訳2001)『思考と言語』(新訳版)新読書社
山岡俊比古（1997）『第2言語習得研究』桐原ユニ
レン，C. L.（1980）『英語学概論』桐原書店
若林俊輔(1990)『英語の素朴な疑問に答える36章』The Japan Times
Klein, Naomi (2008) On the Bailout Profiteers and the Multi-Trillion-Dollar Crime Scene. Democracy Now! 20081117.
Krashen, Stephen D. (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning. Oxford:* Pergamon.
Krashen, Stephen D. (1982) Principles and Practice in Second Language Acquisition. Oxford: Pergamon.
Krashen, Stephen D. (1985) *The Input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
Ogden, Charles Kay(1930) *Basic English: A General Introduction with Rules and Grammar*. London: Paul Treber & Co., Ltd.

Referennces (URL)

古英語の文法
http://ja.wikipedia.org/wiki/古英語の文法
デモクラシーナウ・ジャパン
http://democracynow.jp/
ナオミ・クライン：金融救済で暴利をむさぼるのは誰？
http://democracynow.jp/submov/20081117
不規則動詞
http://ja.wikipedia.org/wiki/不規則動詞
分詞
http://ja.wikipedia.org/wiki/分詞
Democracy Now!
http://www.democracynow.org/
Democracy Now Japan
http://democracynow.jp/
Group: DirecTV Rejects Ad Critical of Israeli Occupation
http://www.democracynow.org/shows/2009/2/4/headlines
Naomi Klein on the Bailout Profiteers and the Multi-Trillion-Dollar Crime Scene
http://www.democracynow.org/2008/11/17/naomi_klein_on_the_bailout_profiteers
Obama Could Expand Afghan War Based on McChrystal Report
http://www.democracynow.org/shows/2009/9/1/headlines
Participles
http://en.wikipedia.org/wiki/Participle
Past Participle
http://en.wiktionary.org/wiki/past_participle
US War Resister Arrested Following Canada Deportation
http://www.democracynow.org/shows/2009/2/5/headlines

Appendix 1　思考実験表の完成図

現在形　(do 原形)
　　(does 原形)
過去形　(did 原形)
未来(形)　(will 原形)

	能動分詞 -ing	受動分詞 -en
be	進行形	受動態
have	ϕ	完了形

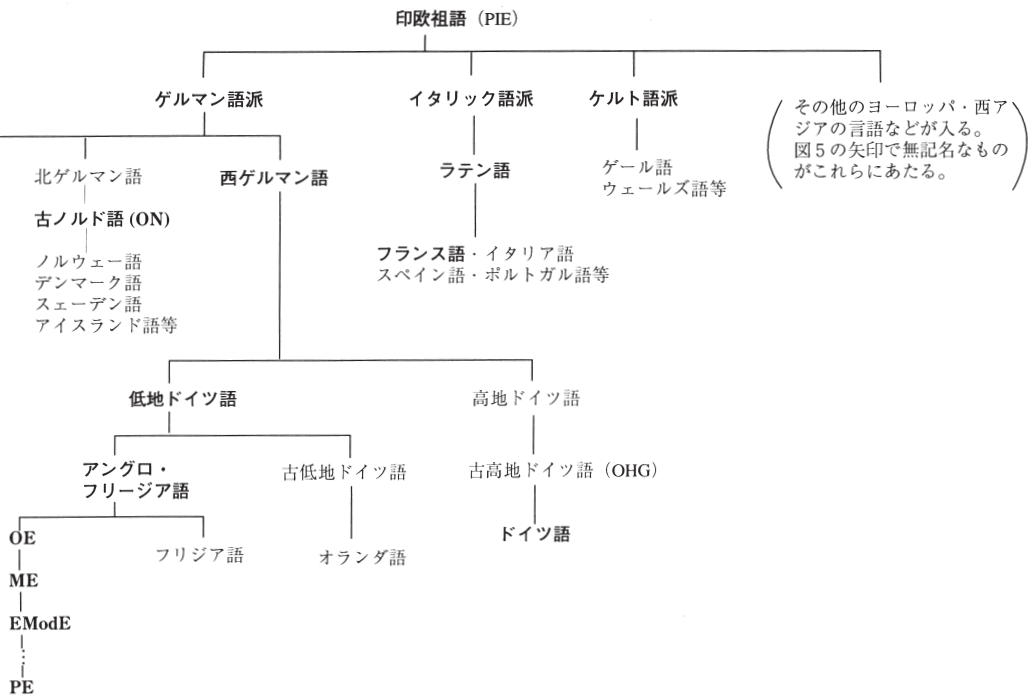
完了・進行 (have -en) (be -ing) ↓
完了・受動態 (have -en) (be -en) ↓
進行・受動態 (be -ing) (be -en) ↓

			肯定形	否定形	疑問形
能動態	単純形	現在	Iraq war(kills)many people.	Iraq war(does not kill)many people.	(Does Iraq war kill)many people?
		過去	Iraq war(killed)many people.	Iraq war(did not kill)many people.	(Did Iraq war kill)many people?
		未来	Iraq war(will kill)many people.	Iraq war(will not kill)many people.	(Will Iraq war kill)many people?
	進行形	現在	Iraq war(is killing)many people.	Iraq war(is not killing)many people.	(Is Iraq war killing)many people?
		過去	Iraq war(was killing)many people.	Iraq war(was not killing)many people.	(Was Iraq war killing)many people?
		未来	Iraq war(will be killing)many people.	Iraq war(will not be killing)many people.	(Will Iraq war be killing)many people?
	完了形	現在	Iraq war(has killed)many people.	Iraq war(has not killed)many people.	(has Iraq war killed)many people?
		過去	Iraq war(had killed)many people.	Iraq war(had not killed)many people.	(Had Iraq war killed)many people?
		未来	Iraq war(will have killed)many people.	Iraq war(will not have killed)many people.	(Will Iraq war have killed)many people?
	完了進行形	現在	Iraq war(has been killing)many people.	Iraq war(has not been killing)many people	(Has Iraq war been killing)many people?
		過去	Iraq war(had been killing)many people.	Iraq war(had not been killing)many people.	(Had Iraq war been killing)many people?
		未来	Iraq war(will have been killing)many people.	Iraq war(will not have been killing)many people.	(Will Iraq war have been killing)many people?
受動態	単純形	現在	Many people(are killed)by Iraq war.	Many people(are not killed)by Iraq war.	(Are many people killed)by Iraq war?
		過去	Many people(were killed)by Iraq war.	Many people(were not killed)by Iraq war.	(Were many people killed)by Iraq war?
		未来	Many people(will be killed)by Iraq war.	Many people(will not be killed)by Iraq war.	(Will many people be killed)by Iraq war?
	進行形	現在	Many people(are being killed)by Iraq war.	Many people(are not being killed)by Iraq war.	(Are many people being killed)by Iraq war?
		過去	Many people(were being killed)by Iraq war.	Many people(were not being killed)by Iraq war.	(Were many people being killed)by Iraq war?
		未来	Many people(will be being killed)by...	Many people(will not be being killed)by Iraq war.	(Will many people be being killed)by Iraq war?
	完了形	現在	Many people(have been killed)by Iraq war.	Many people(have not been killed)by Iraq war.	(Have many people been killed)by Iraq war?
		過去	Many people(had been killed)by Iraq war.	Many people(had not been killed)by Iraq war.	(Had many people been killed)by Iraq war?
		未来	Many people(will have been killed)by Iraq war.	Many people(will not have been killed)by Iraq war.	(Will many people have been killed)by Iraq war?
	完了進行形	現在	Many people(have been being killed)by Iraq war.	Many people(have not been being killed)by Iraq war.	(Have many people been being killed)by Iraq war?
		過去	Many people(had been being killed)by Iraq war.	Many people(had not been being killed)by Iraq war.	(Had many people been being killed)by Iraq war?
		未来	Many people(will have been being killed) by Iraq war.	Many people(will not have been being killed)by Iraq war.	(Will many people have been being killed)by Iraq war?

Appendix 2　不規則動詞変化表

A-A-A 型	A-B-A 型	A-B-B 型	A-B-C 型
become became become なる	cost cost cost 負わす	bring brought brought もたらす	be(is, am) was been ある・いる
come came come　来る	cut cut cut 切る	build built built 建てる	be(are) were been
run ran run 走る	hit hit hit 叩く	buy bought bought 買う	bear bore born 生む
	hurt hurt hurt 傷つける	catch caught caught 捕まえる	begin began begun 始まる
	let let let させる	feel felt felt 感じる	bite bit bitten (bit) 咬む
	put put put 置く	find found found 見つける	blow blew blown 風が吹く
	quit quit quit やめる	have(has) had had 持つ	break broke broken 壊す
	read read read 読む	hear heard heard 聞こえる	choose chose chosen 選ぶ
	set set set 置く	hold held held 持つ，続く	do(does) did done する
	shut shut shut 閉じる	keep kept kept 保つ	draw drew drawn 描く，引く
		lay laid laid 横たえる	drink drank drunk (drunken) 飲む
		lead led led 導く	drive drove driven 運転する
		leave left left 立ち去る	eat ate eaten 食べる
		lend lent lent 貸す	fall fell fallen 落ちる
		lose lost lost なくす，負ける	fly flew flown 飛ぶ
		make made made 作る	forget forgot forgotten 忘れる
		mean meant meant 意味する	forgive forgave forgiven 許す
		meet met met 会う	forbid forbade forbaden 禁じる
		pay paid paid 払う	forsake forsook forsaken 捨てる
		say said said 言う	freeze frose frosen 凍る
		sell sold sold 売る	get got gotten (got) 得る，着く
		send sent sent 送る	give gave given 与える
		shoot shot shot 撃つ	go went gone 行く
		shine shone shone 輝く	grow grew grown 成長する
		sit sat sat 座る	hide hid hidden 隠れる
		sleep slept slept 眠る	know knew known 知っている
		spend spent spent 費やす	lie lay lain 横たわる
		stand stood stood 立つ	mistake mistook mistaken 間違う
		teach taught taught 教える	ride rode ridden 乗っていく
		tell told told 話す	rise rose risen 上がる
		think thought thought 思う	see saw seen 見える
		understand understood understood 理解する	shake shook shaken 振る，揺れる
		win won won 勝つ	show showed shown(showed)示す
			sing sang sung 歌う
			sink sank sunk 沈む
			speak spoke spoken しゃべる
			steal stole stolen 盗む
			swim swam swum 泳ぐ
			take took taken 取る
			tear tore torn 裂く
			throw threw thrown 投げる
			wake woke woken 起こす
			wear wore worn 着ている
			write wrote written 書く

Appendix 3　A-B-C型の分類

受動分詞が -en				受動分詞が -en の変形			
原　形	過去形	受動分詞		原　形	過去形	受動分詞	
be(is, am)	was	been	ある・いる	blow	blew	blown	風が吹く
be(are)	were	been		draw	drew	drawn	描く，引く
bite	bit	bitten (bit)	咬む	fly	flew	flown	飛ぶ
break	broke	broken	壊す	grow	grew	grown	成長する
choose	chose	chosen	選ぶ	know	knew	known	知っている
drink	drank	drunken (drunk)	飲む	show	showed	shown (showed)	示す
drive	drove	driven	運転する	throw	threw	thrown	投げる
eat	ate	eaten	食べる	bear	bore	born (borne)	生む
fall	fell	fallen	落ちる	tear	tore	torn	裂く
forget	forgot	forgotten	忘れる	wear	wore	worn	着ている
forgive	forgave	forgiven	許す	drink	drank	drunk (drunken)	飲む
forbid	forbade	forbaden	禁じる	sink	sank	sunk	沈む
forsake	forsook	forsaken	捨てる	begin	began	begun	始まる
freeze	frose	frosen	凍る	sing	sang	sung	歌う
get	got	gotten (got)	得る，着く	swim	swam	swum	泳ぐ
give	gave	given	与える	do (does)	did	done	する
hide	hid	hidden	隠れる		went	gone	行く
mistake	mistook	mistaken	間違える	go			
ride	rode	ridden	乗る	lie	lay	lain	横たわる
rise	rose	risen	上がる				
see	saw	seen	見える				
shake	shook	shaken	振る，揺れる				
speak	spoke	spoken	しゃべる				
steal	stole	stolen	盗む				
take	took	taken	取る				
wake	woke	woken	起こす				
write	wrote	written	書く				

Appendix 4　印欧語系統図（児馬1996：15）